

バプテスト 自由吟味者



フランク・S・ミード 著

鹿嶋春平太 訳・解説

編集工房 DEP

バプテスト自由吟味者

フランク・S・ミード著
鹿嶋春平太訳・解説

はじめに	4
------	---

訳者解説　〈聖句に真理を探究した人々の物語〉	7
------------------------	---

1　真理	8
2　真理は仮説と違う	8
3　創造神と在物神	10
4　聖書はどう出来たか	13
5　「真理だという宣言」をどう受け止めるか	16
6　聖書メッセージの概略	19
7　キリスト教には二つの活動方式がある	26
8　教理統一教団の生成と発展	31
9　二つの方式を比較すると	35
10　「水と油」の活動方式	43
11　片肺飛行のキリスト教情報	49

バプテスト自由吟味者……………

55

1 章	聖句自由吟味者の活動原理	56
2 章	いくつかの自由吟味グループ	64
3 章	近代バプテストの誕生	74
4 章	新大陸での近代バプテスト	87
5 章	信教自由国家の建設に向けて	98
6 章	信教自由憲法ついに実現！	118
7 章	連合会創設と西部への宣教	127
8 章	連合会、南北に分裂	138
9 章	抜群の教育活動と社会改善活動	141
終章	流血の歴史土壌から咲き出た花	152

訳者あとがき……………

157

はじめに

この本は聖書の中の言葉である「聖句」のなかに真理を探求した人々の物語です。何から話したらいいか……そう、こんなことから始めましょう。

私たちは「西洋文明はキリスト教を知らないといけない」と若いときから繰り返し耳にしてきました。訳者（鹿嶋）も、そんな体験をしながら人生を生きてきました。だがキリスト教のどこがどのように西洋の文化、文明をつくっているのか、誰もどの本も具体的に説明してくれなかった。学校でも、キリスト教はカトリックとプロテスタントという教派に分かれるとは学びましたが、それ以上のことは何もわかりませんでした。

歳を重ねる中でわたくしは「キリスト教の情報には空白領域というか陥没ゾーンとでもいふべきところがある」と感じていきました。そしてあるとき陥没を埋める鉾脈にぶつかった。その情報はなんと、政治権力によって隠蔽されてきていました。

わたくしはそれを伝えようとしたが、何せ世界に隠蔽され続けてきた情報です。

結果的に聞き慣れない言葉、事柄が満載されていました。そんな話を、一介の日本人である訳者が述べても、とても信用されないだろう。それを的確に伝える「本場の本」はないものか。折々に収集してきた諸資料をひっくりかえすと、小さな冊子が目に留まりました。それはこの鉱脈を米国人が簡素に述べた、文字通りの小冊子でした。「この邦訳を造り、その内容を理解するための知識ギャップを、訳者が解説でもって埋める」ことにしよう。わたくしはそう決心しました。

冊子の著者ミードは、バプテストというグループに照準を定め、彼らを物語ることでもって陥没情報を埋めてくれました。鉱脈は、聖句を手がかりにして、全世界の真理を探索しようという彼らの二〇〇〇年にわたる活動の中にあつた。

キリスト教を少しかじった人は、バプテストと言えばプロテスタントの中の一つの教派だと思っています。それが公式の西洋史の常識になっていますから。だが、その本場である米国サザンバプテスト地域でたずねた私に、バプテストたちは「俺たちはプロテスタントでは全然ないよ」と苦笑をまじえて応えました。それは無知からくる間違った質問だったのです。真実は「その対極の存在」でした。教科書や専門書で学

ぶキリスト教知識にはすでにここに陥没があつたのです。

訳者解説

く聖句に真理を探究した人々の物語く

1 真理

バプテストと呼ばれている人々の真の姿をさぐるには、「真理」という語の意味を知ることが必須です。真理とは「もうこれ以上修正する必要のない究極不変の知識」です。それは人間単独では作り得ないタイプの知識です。

2 真理は仮説と違う

人のつくる知識は、修正され続ける運命にある。天空に関する知識の変遷は、それをわかりやすく示してくれます。古代・中世を通して人類は「天空は人の住む地面の上方で東から西に回転している（だから太陽も東に昇り西の空に沈んでいく）」と思ってきました。後に天動説と呼ばれるこの理論知識を、長い間正しいとしてきました。

ところが、近世になって望遠鏡が発明されると、人間の観察可能な範囲は広がりま

した。天空像が拡大して正しいとされる知識は一変した。天空が回っているように見えるのは、「我々の立っている地が球体で、それが太陽の周囲を回っているからだ」と理論は改善されました。後に地動説と呼ばれる理論に、知識は修正されたのです。

そういう修正は、人間の知識では永遠に続きます。望遠鏡や宇宙探索技術が改善されれば観察範囲は広がりますが、限界がある。宇宙は球体で、その直径は九三〇億光年とかに推計されています。人間はその宇宙全体を観察するところまでは半永久的に行けません。のみならず宇宙という球体も、無限の空間の中ではほんの一部だ。人間の新発見と知識修正は終わりなく続き、不変の知識には到達できないのです。

こういう状態にある人間の知識を科学では「仮説」（仮に設定した理論）といいます。科学というのは、人間が五感をベースにして自力で行う認識の手法。その認識方法では理論知識は永遠に仮説であり続けるのです。

「真理」というのは仮説と真逆の概念です。それはもう修正される必要のない究極不変の知識の名前です。この言葉は、江戸時代までの日本にはありませんでした。そう

いう理念がなかったから言葉も生まれなかったのです。

真理は聖書用語で、英語ではツルース (truth) です。邦訳聖書を作ったヘボン先生（ヘボン式ローマ字を創った医師宣教師）は、この聖書独特の用語を日本語にするのに苦心されました。結局、真理という漢字をつくり、それに（まこと）という読み仮名をつけました。

3 創造神と在物神

聖書で「真理」の用語が出てくるのは、「存在のすべて」を知っている神がある、という認識が基盤にあるからです。全存在を知ってる方は、もうそれ以上観察範囲を広げる必要が無いので、そこから出る知識は修正する必要がない。

聖書に登場するその神は「万物を創造した創造神」です。英語ではそれをゴッド (God) と言っています。邦訳聖書で「神」として出てくるのはほとんどがこの神です。聖書はこれを「本物の神」としています。

この神概念が「日本で抱かれてきた神イメージ」と混同されたら以後の思考はすべてずれていってしまいます。だから訳者・鹿嶋は敢えてゴッドを「創造神」と呼んでいます。より詳細には「自分以外の万物を創った」という修飾語がつくのですが、長くなりすぎるので省きました。創造神という語からも「神」に比べると長つたらしい印象を受けますが、これでも簡素化していることをご理解ください。

日本で言う「神」の概念は、「ものの中に染みこんでいる」とイメージされる神様です。石のお地藏さん、木や銅で作った仏像、巨木、巨岩、などに内在するとイメージされる神様はみなそれです。建物の奥深いところや、山や川や海にいますとイメージされるのもそれです。鹿嶋はそれらをひっくるめて「在物神^{ざいぶつしん}」と呼んでいます。「物」質の中に「在」とイメージされる「神」様々という意味です。

人の意識の中ではこの神様は、拜んで「うーん」と念を込めて得られる感慨のようなものになっています。感慨ですからそれは概念や論理を伴わず、漠然としている。対して創造神・ゴッドは明確な理念をもっています。たとえば、万物を創ったのならば空間的に無限の広がりを持っていることになるでしょう。だって、有限でしたら、

その外側のものは「俺が創った」と言いがたいもんね。このように、空間的無限者という明確な属性理念が、創造神の概念にはともなっています。（ちなみに、「無限大」という理念も、この創造神概念によつて人類に導入されています）

時間的にも同様なことが言えるでしょう。もしも創造神の過去に「はじめ（出発点）」があるのならどうなるか。それ以前のは「オレが創った」と言えないでしょう。未来についても、同様です。将来ある時点で創造神に存在の終わりがあつたら、それから先のものは「オレが創った」と言いがたい。万物を造つたのなら時間的にも無限者となるのです。

属性は他にもできませんよ。すべてを創造したのなら、被造物の全てを観察して知っているはずだ。このことを全知と言います。創造神は全知者でもあるのが筋となる。そのことから、この神から出る知識は、究極にして不変な理論知識（すなわち真理）であるのが道理となります。

4 聖書はどう出来たか

バプテストと呼ばれた人々は、聖書の中に「真理」が含まれていると期待して探究してきました。いったいこの本はそれだけの期待を持たれる中身をもっているのか？概略をみてみましょう。まずそれは、前半が旧約聖書、後半が新約聖書という、二つの書物群を組み合わせで出来ています。

〈旧約聖書〉

旧約聖書の著者は二〇人以上います。この人たちは、いずれも飛び抜けて靈感に恵まれていました。教祖として自分独自の宗教を興そうと思えば出来る、超霊感者だった。なのに、みな「万物を創造した神」と自称する存在から送られるメッセージを、靈感受信して言葉に書き留めています。

メッセージは幻でもって与えられています。幻とは今日の映画やビデオのような動画を想像していいでしょう。カラー付き音声付きの動画。そういう幻を超霊感者は見た。そしてそれを創造神からのメッセージと「信じて」受信し記録しました。

二〇人以上の人が、バトンタッチするかのよう受信し書き留めた。記録が作られた期間は紀元前一五〇〇年頃から四〇〇年頃までの長期にわたります。著者はみな古代のイスラエル人でした。古代イスラエル民族に、そういう超靈感者が一一〇〇年にわたって周期的に出たのですね。平均すると五〇年に一人くらいの割合になるでしょうか。イスラエルの人々もまた、超靈感者たちの受信記録を、創造神からのメッセーヂと「信じて」、民族をあげて保存しました。

旧約聖書の聖句は、この幻の受信記録を基盤にしている。超靈感者たちは、受けた幻そのものを記録したり、その情報の大枠の中に自分が直接見聞できた歴史事実を位置づけて書いています。

へ預言者へ

ちなみに幻の受信内容を記録した超靈感者たちは、預言者（英語は prophet）と邦訳されています。この日本語には、受けた幻を「言」葉にして「預」かる「者」という意味が込められている。うまい訳だと思えます。ですからこれは、今時に言う「予言者」とはちがう。こちらはもっぱら「先のことを予言」する人です。

ただし、この預言者という言葉は、実際にはざっくりとした使い方もされています。靈感者には、それを言葉にして書き留めることをしない人もいました。アブラハムという人などは、超靈感者そのものですが、受信内容を言葉にして預かってはいない。けれども彼もまた預言者と呼ばれています。

へ新約聖書へ

後半は新約聖書です。こちらにはイエスの教えを中心とした聖句が記されている。

イエスは教えを述べる際、旧約聖書は創造神からのメッセージ受信記録であると認め、その上で自らの新解釈を語っています。その際イエスは自らを「創造神の子」と宣言して教えています。その教えを記録した新約聖書の著者たちも、イエスのその宣言を事実だと受け入れて書いています。その意味で、聖書は新旧あわせて、創造神からのメッセージ受信記録と「信じた人々」によって書かれた書物ということになる。だからその知識は改善途中の「仮説」ではなく、究極不変の真理だとの認識のもとに記されているのですね。

5 「真理だという宣言」をどう受け止めるか

さて、その「真理だ」という認識について考えてみましょう。聖書の記述者はそう信じていますし、古代イスラエル民族にもそう判断した人がかなりいました。だが彼らを別にすれば、人間がそういう姿勢に同調することは難しいのではないのでしょうか。

人間は生まれて以来、五感で認識できるものが現実実在であり、存在だと思ってやってきているからね。対して聖書メッセージは、五感認識を超えた、超自然の「見えない存在世界」のことがらをも実在として大量に述べている。聖書のこの認識は、一般人にはそう簡単に受け入れられるものではありません。

これを今少し具体的に考えるとこうなるでしょう。一般に「見えない世界」については、人の理性はその存否を、まずは五分五分と判断する、と。今の日本人は概して「そんなものがあるなんて笑わせるな」と反応するかもしれませんが、それは理性的ではありませんよ。感情的です。だって「見えない」ものは、有るとも無いとも断言で

きないのですから。それを「笑わせるな」というのは、その「可能性はゼロパーセント」と決めつけているのですからね。感情的そのものです。

聖句についてもことは似ていますよ。すべてを知る全知者からのメッセージ受信記録と聞けば、一般人の心にも「聖句は真理を含む」という期待も生じるでしょう。だが同時に「そんなこと期待できない」とする気持ちも生じて併存する。その割合は、理性的にはまずは半々となるでしょう。

へ期待に軸足をおくと

これから本書の主人公として聖句自由吟味者という人々が出てきますが、彼らの大半もまずはそうだったでしょう。イエスの弟子だった使徒たちは別として、ほとんどはこの弟子たちの集団に新たに加わってきた人々です。彼らも当初は存否半々だった。その上で、彼らは「聖句は全知者メッセージであるとの期待」の方に軸足をおいた。そして「真理への夢」を抱いて聖句探究に踏み出したのでしよう。さらに、探究過程で「この知識は全知者でない」と得られなさそうだ……」と感ずる事態に遭遇した人々が、群れに残存していったのでしようね。

その体験によって「聖書に書かれていることからは真理を含んでいるかも……」という彼らの期待感が増大していった。五分五分⇩六分四分⇩七分三分……といったぐあいに上昇していった。また彼らはその過程で、この道を進めば人生で経験した知識に全知者からの知識を加えて、生きていくことが出来そうだと感じていったでしょう。

へ「期待せず」も自由

他方、「期待せず」の方に軸足を置いた人も多数出たでしょうね。その人たちは「全知者メッセージへの夢」「真理への夢」など抱かないで生きる方を選んだ。この世の経験から得られる知恵だけで人生を送ることを選びました。人間にはそうする自由もあるからです。

聖書もその自由を支持しているのですよ。この書物を読んでいくと、創造神は人間を「自由意志を用いるように創っている」という鉄則のような思想を見出すことができます。また、そう造った以上、創造神はその自由領域には立ち入らない、という姿

勢も一貫して持っています。この書物には「信じることを強要」する思想は皆無なのです。人間を、どちらかの道を選び取ればいいという状態においてくれる。そうしななかで、聖句を自由吟味する道を進み続けた人々も又たくさんいた。ミードが小冊子で述べているのはそういう人々の二千年にわたる物語です。

6 聖書メッセージの概略

聖書という書物をもう少し具体的にイメージするために、時間軸に沿って概略をながめておきましょう。

へ旧約聖書の概略へ

旧約聖書の最初の著者はモーセです。モーセは「自分より過去」の事柄の幻を受けて、記録しました。

彼の作とされる最初の書物『創世記』には、この天地が創られていく様が記されて

います。もちろんその時点にはモーセは生きてませんよ。その様を幻で見せられて記している。彼はこれも含む冒頭の五巻の書物を書いて、この五冊は「モーセ五書」と呼ばれています。

へ「救い主」への期待とダビデ王へ

「モーセ後」にも超靈感者（預言者）は続きました。彼らは自分より「未来」の事柄の幻を受けて記録しています。とりわけその多くは「将来救い主が現れるよ」という示唆を共通して含んでいます。そしてイスラエルの人々は、預言されている「救い主」とは、かつてのダビデ王のような方だと思い続けました。ダビデ王は、民族のリーダーとして、数々の戦に連戦連勝し、イスラエル国家を大繁栄に導いた王でした。

へ律法とユダヤ教の生成へ

旧約聖書を時間軸に沿って眺めると、そういう大枠になりますが、モーセの受信記録にはもうひとつ重要な要素が含まれています。「律法」^{りっぽう}のメッセー^りジがそれです。彼は預言者の中でもとりわけ大物だったのですね。

律法とは、創造神が「人間が守るべき」として与えたとされる戒め（命令）です。そしてこれに反することが「罪」となっています。人は律法を守れば福（祝福）をうけ、違反して罪人となれば呪いを受ける、というのがこのメッセージの骨子です。古代ユダヤ人（イスラエル人）は、これを万物の創造神からのメッセージと受け入れました。そして律法を守り祝福を受ける活動を開始しました。

モーセが記録した律法は、広範囲にわたって詳細に述べられていました。戒めの多くはつながった文章で述べられているのですが、これらを一つ一つ切り離して法文として書くと、総計九〇〇余にもなるとも言われている。イスラエル民族の中には、これらの法文の間の相互関係や、実生活に当てはめていく際の解釈を研究する学者が現れました。彼らは律法学者と呼ばれました。また、彼らを中心として、宗教施設が出来ていき、彼らは僧侶ともなった。学者僧侶ですね。こうして後に言うところの「ユダヤ教」ができていきました。

へ新約聖書の概略へ

聖書の後半は新約聖書です。これはイエスの行動と教えを中心にして、それをめぐる事柄をも記録した書物です。

旧約聖書に収められるべき幻のメッセージは、紀元前四〇〇年頃に止まりました。以後四〇〇年ほどの沈黙期間が続いた後、古代イスラエル国にイエスが出現しました。このとき、イスラエル国家はローマ帝国に征服され、その属国になっていました。ローマから派遣された総督が頂点に立ち、その支配下でユダヤ民族の国王が政治を行っていた。

これは第二次大戦で敗戦した直後の日本に似ていますね。GHQ（占領軍総司令部）長官のマッカーサーが頂点に立って日本を統治し、その下で日本政府が政治を行っていた。これに似たような状況の古代イスラエル国家に、イエスはユダヤ人として生まれました。当時そこでは、律法の思想に基づくユダヤ教が国家宗教となっていて、高僧たちが宗教思想を統率していました。

へイエスの言行へ

そこに現れたイエスの教えは衝撃的、画期的かつ革命的でした。彼はそれを誰もしたことがない奇跡で証拠づけながら教えた。奇跡とは「見えない世界」に原因を持つと想像される出来事です。これをみると「この人は見えない世界を知り尽くしている」と人々は思うのですね。イエスの影響は、爆発的でした。

教えの概略はこうでした

- ・ 自分はく人の姿をとっているがく創造神の子である。
- ・ 創造神の子は父なる創造神から聞いて、全てを知っている。
- ・ 旧約聖書は、わたし（イエス）のことを（比喻で）述べた書物である。
- ・ 人間は肉体と霊（霊体）とからなっている。
- ・ 肉体は死んだら消滅するが、霊は永続する。
- ・ 意識の本体も霊の方にある。
- ・ 人は霊体（にある意識）の幸福を、まず確保すべきだ。

・ 霊の幸福は、霊に罪があるかないかで決まる。

・ 旧約聖書の罪は、この霊の罪を物質に投影してわかりやすくいったもので、実体は霊の罪である。

・ だが、人間は律法を守りきれない。

・ 罪を犯すと、霊に「死んだ部分」が出来る。

・ みな、この霊の死を自分ではどうにも出来ない。

・ けれども私（イエス）は創造神の子で「罪」を犯さず、霊に死がない。

・ その私が、殺されて死んで、人の罪の代償をつくる。

・ そのことを心に受け入れる（肯定的に認識する…アクセプトする）ものには、それが「実現」する。

→イエスはこう言って、実際に十字架刑で殺されました。そして予告通りに復活し、四〇日にわたって五〇〇人以上の人々の前に現れました。さらにその復活した身体で、

弟子には「教えを地の果てまで宣べ伝えよ」との命令を与えました。また宣教の際に助け手「聖霊」を送る約束をして昇天しました。新約聖書の中心は、そうしたイエスの伝記とその教えを解説した弟子たちの手紙です。

なお、新約聖書の最後には『黙示録』が収録されています。これはヨハネというイエス最愛の弟子に、延々と与えられた幻の記録です。そこでは、将来永遠にわたって起きることの幻が与えられている。このように聖書は、最初の『創世記』でこの世がつくられる幻の記録で始まり、最後の『黙示録』で永遠の未来にわたって起きることの幻の記録で終わっています。

7 キリスト教には二つの活動方式がある

さて、ここでもうひとつ、キリスト教活動の方式に関する知識を追加します。これもミードの冊子の訳書を豊かに味わうには、不可欠な予備知識です。

へ自由吟味方式

キリスト教会の活動方式には、基本的に二つの型があります。第一は、聖句自由吟味方式というべきやりかたです。第二は、正統教理統一方式、とでも言うべきもの。この用語は歴史教科書にも出てきませんので、聞きなれない言葉だと思います。前者の話から始めます。

実はキリスト教会はこの第一の方式で発祥しています。これが人類の歴史にはじめて登場したキリスト教会を形成した。出来ていった教会は初代教会と呼ばれています。活動は紀元後三十五年頃に始まりました。以後一〇〇年余にわたって、この方式のみでキリスト教活動は行われました。

初代キリスト教会は、破竹の成長をしました。発足して三十年がたつ頃には、信徒の群れがローマ帝国全土に散在するほどになった。こんな発展を実現した宗教活動は人類史にも希でしょう。

この教会は、個々の教会員に聖句（聖書の中の個々の言葉）を自由に解釈させました。彼らに数人の小グループを結成させ、リーダーを一人選ばせた。個々人はそのどこか

に属し、自分の解読を持ち寄って集まりました。そして自由に聖句を議論し吟味しあったのです。それ故、訳者・鹿嶋はこれを、聖句自由吟味方式と読んでいます。略して自由吟味方式です

この活動方式のことは公式の歴史教科書に全く記されていない。理由は、この活動者の会派が、これから述べる第二の方式の教会勢力に迫害され、黙殺されてきたからです。この第二の方式の教会勢力は、結果的に国家権力を手に入れたのです。ローマ帝国の国教となり、いわば国家の文部宗教省のような立場を得た。彼らは公式の歴史記述権を独占し、自由吟味方式の活動を歴史に記録するに値しないものと扱ってきたのです。

その状況は、欧州中世で実に一二〇〇年間にわたって続きました。その結果、自由吟味方式のキリスト教活動はキリスト教史には存在しないという常識が出来上がった。常識は固定し、今日も続いています。

へ教理統一方式へ

その第二の方式に移りますね。この活動方式は正統教理統一方式、とでも言うべきものとは前述したよね。こちらでは、個々の信徒に聖書を吟味させないで、教団の高僧た

ちが議論して合意した聖書解釈を唯一正統な解釈と定めます。それを信徒に与える。

聖句解釈は本来、個人によつて個性が出るものです。それを自由にやらせておけば、教会員の聖書理解がバラバラになるとこの会派は懸念します。少なくとも教会を統一して整然と運営することはできなくなるゝそう考える。そこで教団幹部が議論して合意した解釈を一つ造り、これを唯一正統なものとして与え、信徒を統一的に導いていこうとするわけです。解釈のことを教理ともいいます。ですからこれは正統教理統一方式ともいふべきものとなる。略して、教理統一方式です。

これから以上の二つの活動方式を、教会の事例のなかでもう少し具体的に述べます。実はそれは同時に教会運営に限らず、人間の社会活動全般を根底から方向付ける「集団活動の型」にもなっている。読者が他のどれかの集団ゝ会社や役所ゝをもイメージに浮かべながら読んでくださることを期待致します。

へ初代教会は自由吟味教会へ

キリスト教会はイエスの直接の弟子たちが開始しました。それが初代教会と呼ばれ

ることは前述しましたね。

この教会はドラマチックな出来事を契機として発足しています（事件は新約聖書に収録されている書物『使徒行伝』に記録されています）。イエスは十字架刑で殺された三日後に、復活して人々の目の前に現れ、教えを追加した後、天に昇っていきました。その後、弟子たち二〇〇人以上が、エルサレムの大きな部屋に集まっていた。すると轟音が鳴り渡り、彼らの口から、各々当人にも意味のわからない他国の言葉があふれ出した。この書物はそう記録しています。

当時、エルサレムには聖書（この時点では聖書は旧約聖書のみ）を熱心に調べている人々が沢山いました。彼らは轟音に驚き、弟子たちの大部屋に入ってきて、その様を見て仰天しました。そしてこの事象を聖書でどう理解したらいいのか、知りたがりしました。

すると弟子のリーダー格だったペテロが、それを旧約聖書の聖句から解き明かしました。それまでに聞いたことのない彼の解説に胸を打たれて、人々の目から鱗が落ちた。彼らは、このイエスの弟子たちの集団に即座に加わりました。

噂は草原の火のように広まり、さらに大勢の人々がやってきました。その結果参加者

はこの初日だけで三千人になった、と『使徒行伝』は記しています。また、この記述から、以後も参集者は続いたとみられています。事件を機に新しく加わった教会員は、エルサレムだけでも三万人はいたと推定されている。五万人くらいに達したとみる人もいます。

だけど、これを受けて立った側の先輩たちは大変だったでしょうね。イエスに直接教えを受けた弟子を使徒といいます。十二人いたので、十二使徒とも呼ばれています。イエスがいたときには、使徒とイエスをさらに外から取り巻く人々も七〇人ほどいた。彼らみんなはいつも共にいて、宣教旅行をしていました。

この事件が起きた時には、イスカリオテのユダ（イエスを裏切ったとして有名）という弟子がいなくなっていて、使徒は十一人でした。彼らと七〇人をあわせても、突然参加した多数の新会員を指導するには、あまりに少数だった。

使徒たちは参集者を小グループに分けました。リーダーを一人選ばせ、その内の一人の家で聖書の解読を自由に議論させた。こうして初代教会は聖句を自由に吟味する教会になりました。ちなみに、この小グループの集いは、後に「家の教会」とも呼ばれるようになります。初代教会は、リーダーを介してつながるスモールグループの連携体でした。

へバプテスト自由吟味者は米国だけでも四千万人ゝ

ただし、この活動方式については、聖書はそのものズバリで記してはいません。けれども、この方式を延々と受け継いできている精神的子孫とでもいうべき人々が、現在沢山います。本書でバプテストと称されている人々もそうです。彼らはいま、米国南部だけでも四千万人ほどいる。これらの人々がいうなれば、生身の歴史資料になっている。いまの我々はこれを見ることで、初代教会当時の活動状況をリアルに観察することが出来るわけです。

8 教理統一教団の生成と発展

へ教理統一方式ゝ

今度は第二の、教理統一方式をとった教団の生成と展開を追ってみましょう。この教団は、初代教会が発生してから、約百年あまり後、紀元後二世紀中頃に出現してい

ます。これが出来た経緯を示す文献資料は訳者の知る限りでは、残っていません。だが鹿嶋は企業や世界の教会活動を観察してきた結果、その経緯を十分な確信を持って推定できます。

へ参入障壁が低下したへ

初代教会は冒頭から爆発的成長をしました。新しい宗教運動が急成長すると、近隣者は気味悪く感じるものです。当初人々は恐怖感混じりの怒りで集会を襲撃したりしました。にもかかわらず教会は加速度的に成長し続けた。開始後三十年で、信徒がローマ帝国全土に散在するようになりました。

宗教活動が広く普及するようになり、かつ、思ったほど有害でないとわかると、人々は徐々にその存在を容認していくものです。初代教会もそうでした。当時のクリスチャンには、いのちを投げ出して病人看護活動を積極的にする人も多くいました。それもあって、迫害する人は急減していった。こうしてキリスト教会への参入障壁は、様変わり到低くなっていきました。

へ現世利得は多々あった

初代教会方式の教会には、社会経済的魅力もありました。教会では発足以来、メンバーが生活面でも互いに助けあっていました。

「信徒はもてるものを使徒たちのところに提供し、使徒たちはそれを信徒の必要に応じて分け与えていた」と聖書にあります。（『使徒行伝』二章44～45節）。

（後にマルクスはこれをパクって「共産社会になれば」人々は能力に応じて働き、必要に応じて取る」と、自分の社会思想の宣伝に使いました）

教会では加えて、病の癒しも現れ続けていました。一般人はこのような現世利得を得られることをも、知っていた。人々の教会への参入欲求は上昇傾向をたどりました。

教会参加への障壁が低下し、同時に参加利得が高くなると、現実の社会経済的利益にあずかるのを主動機にして教会に参加を希望してくる人が、急増します。キリスト教会は「来る者拒まず、去る者追わず」という原則で活動する組織ですから、こういう人々も受け入れます。その結果、紀元二世紀後半からの新参加者は、この種の人々が大半を占めるようになりました。

へ指導者が聖書の要約をつくる

こういう参加者が爆発的に増えると、運営上の新しい問題が教会に起きてきます。彼らの大半は、自ら聖句吟味活動を実行する力がなかった。文字を読めない人も多数きたでしょう。裕福だがビジネスが忙しく、教会活動に多くの時間を割くことが出来ない人もいたはずだ。こうした人々には聖句への探究心は強くありません。彼らはスモールグループに編成してあげても、自主的な聖句吟味活動はできないのです。

それでも彼らにも一定の教会員の自覚を持つてもらわねばならない。それにはある程度、聖書の思想を知ってもらう必要があります。指導者たちは結局、聖書を簡素に要約して「これがキリスト教の正統な教えだよ」と示すしかなくなりました。教理統一方式の萌芽ですね。このころには、イエスの直接の弟子たちは死んでいませんでした。

9 二つの方式を比較すると

ここで二つの方式を比較してみましょう。まず初代教会でなされてきた自由吟味方式にもう少し立ち入ってみます。

へ自由吟味方式での教会分裂は起きないへ

聖句を自由に探求吟味していくと、誰もが体験することがあります。探究過程で、奥義と感じられるものを発見する。そのとき「真理を見出した！」という霊的感動と深い喜びが得られます。平たく言えば醍醐味が味わえます。

会員はこうした個人解説での意見を、スモールグループでの相互吟味の場にもっていきます。披露すると理解され、同意が得られることが多い。グループ仲間がその解説をさらに展開してくれることも起きます。

こうしたなかでは、メンバーは聖句解説において、基本的なところで同意・共有できるものを多くもつことになります。その過程で、霊的感動という心情体験もわかりあえる。だから、個人の聖句解釈自由を原則にしてやっていっても、実際には解釈が個々バラバラになってしまうことは起きないのです。むしろスモールグループが深い理解

を共有し合う核集団となって、教会全体の一体性をも極めて高いものにしていきます。一番よくわかるのはやってみるのですが、その現象は、米国南部のサザンバプテストチャーチと称される教会で容易に観察できます。

へ教理統一教会では霊的感銘を補填するへ

今度は教理統一方式の教会をみてみましょう。前述のように、こちらでは一般教会員は、教団が正統だとする聖書の解釈を与えられます。信徒は聖句探求を全くしない。だから聖句の奥義の発見をしたときの「真理を見出した!」という霊的感動は得られません。そのままでは靈感の充足不全が顕著になりますので、担当指導者は、様々な演出やサービスでもってその補填に向かうことになります。

へ荘厳な礼拝儀式を提供へ

その方策のトップバッターが、荘厳な雰囲気での儀式でした。指導者たちは、日曜日に厳粛な礼拝儀式を開催して大衆信徒を敬虔な気分にしてあげました。礼拝には壮麗な式服で登場してあげる。献金でもって壮大な礼拝堂（聖堂）の建設もします。音

楽は靈感を開く効果を持つので、荘厳な雰囲気醸し出す合唱も訓練された聖歌隊にさせます。指導者はこうした礼拝儀式を毎週準備し実施しました。

指導者はまた、信徒を規律で縛ってあげました。前述した律法（人間が守るべき、と与えられた法）を用いてそれをしてあげた。規律とか道徳で縛ってもらうと、人は一定の宗教的緊張と感触をもてるものです。荘厳な演出と適度な規律、その二つで教理統一教会は、「真理に触れたー」という実感の欠如をある程度補うことができました。

＜週日にも儀式サービス＞

指導者は週日にも、一般信徒の日常生活の折々に神秘感ある儀式サービスを提供しました。近親者が死んだら葬送の儀式をし、結婚には結婚式をし、子供が生まれたら祝福の儀式をしてあげる。信徒はその時々にも適度に霊的な気持ちを味わうことができました。

＜指導者需要が急増し職業僧侶が出現＞

その過程で指導者自身も変化しました。教会発足当時の指導者は、ボランティア奉

仕者でした。奉仕への自発的謝礼はありましたが、制度化された報酬（給与）はうけていなかった。

だが、教理統一方式では、教会指導者の仕事は激増します。聖書のわかりやすい要約を合意し合って作っていくのは大仕事でしたし、荘厳な礼拝儀式を、日曜毎に举行できるよう準備するのも大変でした。週日に、信徒に様々な儀式サービスを提供するのだって、骨の折れる仕事。このような業務をボランティア奉仕者だけでこなしていくのは不可能です。かくして教理統一教会では、指導業務に専念する職業僧侶の育成に進まねばならなくなりました。

職業として専念すると、僧侶の業務能力は洗練され、多様化していきます。教会堂設計に優れたものも、音楽編成能力に卓越したものも現れる。神学（聖書解釈学）能力に秀でた者は、神学校設立に注力し、後継僧侶を養成しました。

へ階層管理組織で統率することが必要になるへ

教理統一方式の教会には、もう一つ課題が生まれました。拡大する教会を、信徒の“一体性”を維持しつつ運営していくことがそれでした。

初代教会では信徒たちは聖書の奥義やそれから得られる世界理念を深く共有しあつて、自立的に一体性を形成しました。だが、後に大挙して参入してくる大衆信徒にはそうしたまとまりを自ら形成する力がなかった。そこで指導者たち自身が現代の役所や企業でとられているようなピラミッド型の管理階層を形成しました。そして僧侶自身がその命令系統のなかで整然と行動し、その下部に信徒を組み込んで統率するという形で一体性を実現しました。

へ司祭、司教、大司教へ

職業僧侶の職位階層は司祭、司教、大司教です。司祭は、担当教区の教会の礼拝や聖餐せいさんの儀式を執り行いました。聖餐とは、イエスの肉と血を記念するため、パンと葡萄酒を口にする行為です。イエスは教会ではそれをするよう命じていましたが、教理統一教会では、司祭がそれを導いたわけです。司祭の職位は会社でいえば、課長とか係長に相当するでしょう。

司教は、各地の教会やその司祭たちを地域ごとにまとめて統率しました。これは

現代の会社や役所では部長ですね。

大司教は、司教の管理する地域をさらに複数まとめて管理統率しました。会社ではこれは重役だな。その上で教団全体に関わる事柄は、大司教の会議で決めていた。だが後年、教皇（法王ともいう）という最終決定の絶対権限保有者を登場させます。会社で言えば最終決定権を持った社長。これによって教理統一方式の教団では、大司教の会議で意見が分かれて膠着状態が続くようになりました。

へ信徒の教会生活は超楽に

こういう体制のもとですと、信徒の教会生活は自由吟味教会に比べて格段と楽なものになります。彼らには聖書の中の言葉（聖句）の解釈を、あれこれ思案するという活動が全くない。日曜ごとに礼拝に出て座っていて、儀式が終われば献金して帰ってくればいい。諸事はみなプロがお膳立てしてくれています。日常生活でも、教会は結婚式や葬式も厳粛に、かつ、手慣れた技でやってくれるのです。

この方式の教会は、大衆にとって非常に参加しやすいものなんです。他方、教会側にとってもこの方式は、一度に多数の信徒をさばくマスプロ運営を可能にしてくれ

ます。需要と供給は見事にマッチし、信徒も献金総額も加速度的に増大しました。教理統一教会は、高度に組織化された大教会に発展していきました。

へ聖職者の自己生産を開始へ

そうしたなかでこの教会は自らをカトリック教会と称するようになっていきます。カトリックはラテン語で「普遍的」という意味を持っています。自分たちの方式の教会こそが、世界が従うべき普遍的な教会だと自称していくわけです。

この世の現実的な需要に機敏に応じつつ発展する宗教団体は、こういう動向をたどるものです。始めに大衆信徒の世話を担当した指導者たちには、そういうつもりはなかったでしょうけどね。現実の必要への便法的対応を、その都度都度に行うという意識で努めていたでしょうけどね。流れの中でそうなっていく。がともあれ、これからこの方式の教会をカトリック教会と呼ぶことにします。

カトリック教団は大規模化するにつれて、指導者（職業僧侶となるべき人々）が沢山必要になり、聖職者の内部生産を開始しました。神学校を設立し、若い神学生を養成し

ていく。だがこれが自由吟味教会への攻撃要因を形成することになりました。

神学校では教会の統一教理を唯一正統なものとして、教えることになります。諸教科もまた、そういう理念の下で教えられることになっていきます。こうして神学校で教わる正統教理こそが、普遍的な聖書解釈だと信じて疑わない僧侶が再生産されていく。この種の動向は、この世の他の人間組織においても起きていく自然な歴史現象なのです。だがこの神学校育ちの僧侶は、それに留まることなく、自由吟味活動者を「異端！」として攻撃する存在にもなっていました。

へカトリック教団、ローマ帝国の唯一国教に▽

教会とは通常、個々の地域の僧侶や信徒の集団や教会堂などの建物を意味しますが、その総体を指すこともあります。またそれは教団ともいわれます。カトリック教団は、紆余曲折を経てローマ帝国の唯一国教になりました。国教となれば、僧侶は国家宗教の管理者、統率者になる。教団は軍隊などの国家機関を使うことが出来る権力をも手中に収めました。

他方、聖句自由吟味者はどうか。当時彼らの数は依然として膨大でした。なにせ、キ

リスト教活動は、最初の一〇〇年間はこの方式だけでなされ大発展してきたのですから。彼らは、スモールグループの連携体として、草の根的に広範囲に活動していた。

その状況で教理統一教会が国教となったのです。僧侶たちは自分たちの方式こそが「普遍的」だと信じていて、自由吟味者に自分たちの教会への合流を呼びかけました。だが、自由吟味者は、従わなかった。これら二つの活動方式は、水と油そのものだったのです。訳書本文に入る前に、これについても具体的に述べておかねばなりません。

10 「水と油」の活動方式

へ自由吟味方式では個々人に聖句解釈の自由を認めるへ

二つの教会方式は、多くの面で対極的でした。

自由吟味教会ではまず第一に、個人の聖書解釈を自由に行っています。個々の教会員が聖句に直接対面しその意味を自由に思案するのを、許している。

第二に彼らは、数人のスモールグループをつくって互いに解釈を吟味し合います。個々

人が自由に吟味した後に、それを持ち寄ってつきあわせ、検討しあうのです。すると実際上、基本的な大枠の解釈には一致が見出されていく。そしてこれもやってみればわかるのですが、この一致は、グループ討議によつて一層深まっています。

だがこれは、体験したものだけが認識できる事実なのです。悲しいことに体験のない外部者は、いつの時代にも真逆の事態を想像します。聖句解釈を自由にしたら、各々勝手な解釈に分かれ、教会はバラバラになってしまう、と想像する。この直感認識は、いま現代においても他方式の聖職者と一般人の常識になっています。

第三に、この方式では一般信徒と牧師など職業僧侶との間に権威の上下を認めません。これは「個人の聖書解釈自由」という第一原則から繋がって出てくる原理です。もし権威の上下をつければ、教会員の聖句解釈は実質上、自由でなくなるからです。

日本ではこの原則を「万人祭司」といったしやれた言葉に邦訳しています。祭司とは、ユダヤ教会での聖（教）職者の呼び名です。この用語を使って「もし教職者である祭司が権威ある存在だというのなら、一般信徒はみな祭司だ（権威は同等だ）」といっているわけです。

第四に、自由吟味者は教会の間にも権威の上下をおかない。これもまた、第一原則を実質上有効に機能させるために、論理上出てくる原理です。教会は連盟を作って運営されていくことが多いです。その場合、所属教会に権威の上下を認めれば、上位の教会の会員の意見が、下位の教会の人の解釈より無条件に優位に立つていくことになる。さすれば、第一原則「個人の聖句解釈自由」が機能しなくなってしまう。

また教会は外部に、新しい教会を開拓していくことをよくします。こういうとき、もとの教会を母教会、新しい教会を支教会と呼んだりします。母教会は、支教会が建ち上がっていく過程で、資金や人材で援助するのが普通です。そのとき放っておけば母教会の見解がなにかにつけ、支教会より上位に扱われやすくなる。

だがそうなれば、連盟に属する教会の信徒に聖書自由解釈の原則は成り立たなくなります。そこで、個々の教会の独立を基本的に認めるのです。これは万人祭司原理と同じ発想の原理ですね。それは「各個教会独立の原理」と称されています。

このようにして、個人の聖句解釈自由という原則が実質上機能するように、関連す

る他の様々な局面の行動原理も出来上がってきます。それらが全体として、聖句自由吟味運動を維持していくためのルールの体系をなしているわけです。

へ教理統一方式では教団教理以外の解釈を許さない

正統教理統一教会では真逆です。こちらは一般信徒に自由な聖書解釈を赦さない。それをさせないために、聖書を直接読むことをも禁じます。人間、読めば疑問を持ったり、色々考えるからね。もちろん、スモールグループも禁止です。

聖書吟味は、プロの職業僧侶だけが行います。彼らが全体会議（公会議）で合意した解釈を、教団の正統教理として、一般信徒に供給する。こうして職業僧侶が上位の権威をもって信徒を導くのです。ここでは万人祭司など、無知者の戯言となります。

またこの教会では職業僧侶自身も、明確な管理階層を形成して、上下秩序ある行動をとります。一般信徒は各地区教会の司祭が管理し、各地区教会は司教が管理する。司教が管理する地域の教会群はまた、大司教に管理され、その頂点に教団本部があります。そこに教皇という最高権威者がいて、全体を統率する。

教理統一方式では、こうした法規体系で教会を組織化し、統率のとれた教会運営をしていきます。だから、「各個教会の独立」も異端の言うたわごと、となります。この面でも、二つの教会は水と油なんです。

へ学問知識の修得法に照らすとへ

各々の活動方式で信徒はどう育つか、も見ておきましょう。それは二つの方式を、現代の学問知識の習得方法に投影してみるとわかってきます。

教理統一方式は、日本の義務教育過程における学校教育の方式に似ています。そこでは生徒に教科書を与え、それが正しい知識を示しているとして学ばせている。だが実際には、教科書に載る知識は、その時期に学界で優勢になっている定説知識であるにすぎません。

学界にはいろんな説を述べる学者がいて、各々が自説を吟味し研究を続けている。そのうちの定説扱いされることになった知識を、唯一の正しい知識として生徒に与えているのです。教理統一教会での一般教会員は、この小・中学校の生徒の状況に似て

います。

他方、自由吟味方式の教会員の立場は、学会の学者に似ています。一般信徒は、自由に聖句探究をし、小グループで議論しあうのですから。

そう聞くと「でも一般信徒は、学者のように知的に卓越してはいないのでは……」との思いが脳裏に浮かぶかも知れませんね。だが、少なくとも神学的知識、聖句解読の知識に関してはその直感は正しくありません。自由吟味教会の実態を知るために、訳者（鹿嶋）は、米国南部の神学大学院に客員研究者として一年間滞在しました。そこに籍を置きながら、同時に三つの自由吟味教会に出入りさせてもらいました。

そのうちの一つは、熟達した教会員に神学講義を毎週水曜、夕方にさせていました。教会員は、それに自由に出席して議論するわけです。他方、大学院ではもちろん聖書神学の講義があります。二つを比べてみて、訳者は教会での講義が、神学大学院の教授の講義に少しも遜色のないものであることを観察した。素人だろうと有給の職業研究者であろうと、解読吟味を続けていれば聖書解読で人間は優劣のない状態になっていきます。おそらく、他の知識分野においても、ことは似ているでしょう。

以上に見るように、自由吟味方式の教会と教理統一方式の教会とでは、ほとんど全ての面で水と油になります。前者が後者に吸収併合されることなど、起き得ないのです。

11 片肺飛行のキリスト教情報

ヘクリスチャンによるクリスチャンの殺戮

話を、カトリック教理統一教会が、ローマ帝国の唯一国教になったところにもどしましょう。教団はとにかく自分の方式に自由吟味教会を吸収しようと思いました。だが、自由吟味者は頑として従わなかった。

すると教団は、国家の軍隊を用いて、自由吟味者の居所を襲い、逮捕し、処刑しました。秘密警察のようなものもあり、人民同士の相互告発もありです。人々は恐怖のもとで畏縮して暮らすことになった。この状況が延々と続いた時期が、欧州史におけるいわゆる中世暗黒時代です。この時代、人々の精神・知性は萎縮し学問科学は衰退しました。

著者・ミードは、こうした時代におけるバプテスト自由吟味者たちの姿を描写することでもって話を開始しています。以後彼らが、人間の自由意志を妨げない社会を造り、国家を建設していく様を描いていきます。

権力をもつ側が、対抗する優れた思想を封じ込める有力な方法は、その思想の普及を徹底的に妨害し、同時に、自己の思想を大々的に宣伝し続けることです。聖句自由吟味活動は、カトリック教団のその政策によつて完璧に押さえ込まれてきました。それは人類史上に比類無き執拗さともなったもので、自由吟味者に関する情報は、実に一二〇〇年の長きにわたつてパーフェクトに封殺され続けた。その結果、人類はいまだに、歴史教科書や一般専門書にもその活動記録を見ることができません。今の定番書物に「書かれている」キリスト教の諸教派は、みな、教理統一教会であるカトリック教会とそこから派生したものばかりです。

いわゆるプロテスタントもそうですよ。ルター派教会は、宗教改革でおなじみのマルティン・ルターが「教皇という存在のない教会」を構想して実現した教理統一教会です。長老派教会は、信徒の代表者（長老）が教会を運営する方式の教理統一教会。

これは、ルターと並んで名を残している宗教改革者、カルバンの構想したものだ。その他、教科書に出てくる教派は、教理統一方式の教会ばかり。専門書もこちらの教会だけについてあれこれ述べているのみ。

これは、自由吟味方式と教理統一方式という、二つの大潮流の一方に目をふさいだ歴史記述だよね。こういう片肺飛行の情報だけが、いまだに大手を振って人類社会をのし歩いているのは、正直言って驚くべきことです。こう言われても読者が驚かないというのならば、そのこと自体を訳者は驚くでしょう。本書はその黙殺された潮流の方の、キリスト教活動を描くものです。それを明記するために訳者は、異例に長い事前知識を書きました。

ヘワルド派、アナバプテスト派、メノナイト派

ミードは、バプテスト派以外の自由吟味者の群れにも触れています。ワルド派に少々、そしてアナバプテスト派、メノナイト派にはそれ以上のスペースを割いて論及している。バプテスト派は現在、自由吟味者の最大の会派になっています。それはいま、米国

南部で圧倒的に多数を占める教会を形成している。次いで大きいのが、メノナイト派で、この会派は、現在米国の北西部を本拠として活動しています。

へ米国南部での呼称へ

最後に、用語に関する若干の情報を追加しておきましょう。米国サザンバプテスト地域では、個人の聖書自由解釈を許す思想を、バイブリシズム (Biblicism) と称しています。

一般の辞書にはない言葉ですが、バイブリック (Bible) は「聖書の中の具体的な語句 (聖句) に則って」という意味をもっている。米国南部英語では、これをスクリプチュラル (Scriptural) ということも多いです。

バイブリシズムの、その理論的な意味は、「聖書の解釈 (教理) よりも聖句そのものを上位に置く」となります。イズム (ism) は「こちらの方が優れている、とか、こちらが上位である、こちらを優先する」という意味だからね。日本語にしたら、聖句主義となるでしょう。

けれども、その日本語が、聖句を自由に吟味する主義と日本人に解されるには、ま

だまだ、時間がかかりそうです。そこで訳者はあえて、聖句自由吟味主義としているわけ。略して自由吟味主義です。それ故、話は重層的で複雑になりますが、読者がその意図をくみ取って下されば幸いです。ちなみに、教理主義（正統教理統一主義）の米国南部英語は、クリーダリズム (creedalism) ないしはドクトリニズム (doctrinism) です。

長い解説文でしたね。では、本文に入りましょう。

バプテスト自由吟味者

1章 聖句自由吟味者の活動原理

バプテストと呼ばれた聖句自由吟味者たちはいつからいるのか？

この問いは、山々はいつからあるのか？という問いのようなものだ。どちらも日付けを言うのは難しい。どれが最初でどれが二番目かもはっきりしない。彼らはキリスト教の教派の中でも別枠の存在なのだ。

通常、人間や社会組織には誕生地と誕生日がはっきりしているものだ。メソヂスト派教会にはジョン・ウエスレー、チャールズ・ウエスレー兄弟という創始者がいる。ルター派教会の人たちは創始者ルターと誕生地ウィッテンバーグを知っている。長老派教会の人々は創始者カルヴァンと、この教派の誕生地ジュネーブを知っている。だがバプテストはそうではないのだ。

あるものはこう言う。

「創始者はイエス以外にいないよ。わが教派の創始日は、イエスがヨルダン川でバプテスマ（洗礼）を受けた日だ。我々はいかなる人間の權威をも、如何なる人間の教理も認めないよ。われらの信仰は、ローマに最初の教皇が登場した時以前から生きていた。我等は宗教改革時代より前からいるプロテスタントだ。ルターが生まれる前からいるのだ」

またこういうものもある。

「我が教派は一六〇八年、ジョン・スミスとともに始まっている」と。

こういう問いもある。

バプテストに教会作法はあるのか？ 開祖無き聖徒集団なのか？ あるいは開祖だらけの信徒集団か？ バプテストは教会法を持たない低級者集団なのか？

……だがこれらの問いは、いずれも的をっていない。筆者はこう述べておこう――トーマス・ジェファソン以前にも民主主義者はたくさんいた。だけど米国民民主党は

ジェファソンでもって始まっているよ。同じようにバプテストは昔からたくさんいた。だが、「二つの教派」としてのバプテスト派は、一六〇八年に英国においてジョン・スミスとともにスタートしているよ。けれども、そのスミスだって純粋な歴史背景のなかに位置づけるのは容易でないんだ。

「ヨルダン川誕生説」に立って、その当時から今日までのバプテスト教会の流れを示すのは困難なのだ。スミスの教会は他の教会との正規な繋がりを持つことなくして突発的に出現しているしね。

ただし、スミスが「我等の活動原理（プリンシプル）は、イエスがヨルダン川で受洗した時と同時に始まっている」というのは筋が通っている。↓ただその活動原理とはどんなものだろう？

1、信仰者バプテスマの原理

まずバプテスマ（洗礼）の原理からいこう。

それは「洗礼は信仰者バプテスマのみ」という原理だ。「聖書に幼児洗礼の有効性を保証するところなどない」とバプテストは言う。「洗礼はイエスとバプテスト精神への忠誠を公に誓うもので、赤ん坊にそんなことできるわけがない」というのが彼らの主張なのだ。

2、聖句最終権威の原理

次は聖句を最高権威としてそれに忠誠する原則だ。多くの人にとってこちらの方が信仰者洗礼の原理より重要だ。バプテスト教会には、命令権を持った法王（教皇）や枢機卿などはいない。むしろ司教も存在していない。教理書も信仰宣言（告白）書もない。あるのは聖書のみだ！ バプテストは聖句から離れないのだ。

キリスト教徒は、イエスキリストを教会と良心に対する唯一の立法者であり王とする。この原理をつかんで離さない。だがバプテストは同時に、聖句から離れないのだ。

3、各個教会独立の原理

第三は、「各個教会独立の原理」だ。

バプテストは完璧な聖職者組織など目指さない。望むのはクリスチャンとしての品性だ。各々の信徒グループが、自分たちの意志で教職者を叙任してはいる。だが信徒は彼らに命令することも、彼らを解任することも出来る。

信徒グループは、自らが望むように教会を運営出来る。一般信徒は牧師と同等の権利をもっている。これは民主主義の一形態だ。ここには「個」が生きる余地がある。

4、政教分離の原理

第四は、教会と国家の完全分離の原理だ。

バプテスト教会が国教になったことは、一度だってない。政府や国王からの聖職位

を受け入れたこともない。彼らは流血の犠牲を払いながら「国家は政治問題だけを統治し、教会に関与すべきでない」と主張し続けてきた。彼らは天国（創造神が王として統治する天の創造神王国）を愛する愛国者なのだ。彼らは、時の為政者への忠誠以上の忠誠を、常に創造神に対して尽くしてきた。

「良心（精神）の自由」と「国家と教会の完全分離」を、彼らは訴え続けてきた。そのためどれほどの苦しみを受けてきたことか！ 嘲られ、中傷され、罰金を課され、鞭や鉄棒で打たれた。火あぶりの刑、脱臼刑（拷問台で引っ張って手足の関節を脱臼さす刑）も受けた。

にもかからわずバプテスト自由吟味者は頑として自説を捨てなかった。拷問者たちにとって、バプテストから頭が引きちぎれるのを期待するのは、人間が頭なしで歩くのを期待するのと同じことだった。

そして見逃してならないことがある。

かくの如くに過酷で流血に満ちた歴史に置かれながら、バプテストは迫害者に決し

て仕返しをしなかった。また自分の信ずるところのために他者を迫害したことも、一度としてなかった。

創造神からの靈感を受けると、心に天国への愛国心が生じるものだ。天国への愛国心が、人間のところにそういう精神を形成する。信徒集団の形態がどうであろうと、あるいはグループが孤立していようがいなかろうが、この精神はイエス以来、幾世紀にもわたって一貫して続いて来ている。

昔から、いま述べたようなバプテスト原理の、一つないしは全てを主張する英雄的な集団は、そこかしこに現れてきた。だがそれだけでもって、彼らを厳密な意味でのバプテスト集団と呼ぶの早計だろう。現存する歴史資料をもとにバプテストをさかのぼって追って行けば、組織化されたバプテスト教会が最初に現れるのは十二世紀以降となる。それより前にバプテスト教会があったという学者は、優れた学者とは言えない。

近代バプテスト（近代英国に発生した）は、十六世紀のアナバプテスト自由吟味者

の子である。そして十二世紀のワルド派自由吟味者の孫である。くこう認識したら、それで十分だ。

(訳者注)

ワルドは英語では Wald だが、日本では通常ウォルドでなくワルドと記されている。

(1 章 聖句自由吟味者の活動原理 完)

2章 いくつかの自由吟味グループ

(訳者解説)

ミードは次に、英国近代バプテストの生成に関連が高いグループを三つあげて説明します。ワルド派、アナバプテスト派、メノナイト派の三つがそれです。他にも聖句自由吟味グループは沢山ありました。カタリ派もその一つで、簾木蓬生『聖灰の暗号』新潮社、は彼らが受けた悲劇的な連続火刑を描いています。

だが、自由吟味者の集団は、その存在が認知されにくいです。集団が固定的な管理階層組織をもたないし、豪華な教会堂を建てたりもしないからです。彼らの集団は、流動的な草の根的存在です。名称も、外部の人々が思いつきでつけるニツクネームのようなのが、ほとんどです。

では、本文に参りましょう。

【ワルド派聖句主義者】

最初の上質な反国教主義者は、ワルド派の人々（ワルデンシアン）だ。彼らは、十二世紀にローマカトリック教会と異なる歩調をとった。以来いかなる拷問を受けても、国教であるローマカトリック教会と歩調を合わせることはなかった。

ワルド派の名は、フランスの都市リヨンのピーター・ワルドに由来している。彼は財産家だったが、聖書の中のイエスの言葉を讀んで、その全てをうち捨てた。その言葉とは、若い資産家の青年指導者に向かってイエスが与えたもので、「財産を捨てて私に従え」という命令だった。ワルドは清貧の重要性を悟った。

彼はまた、伝道はその地の住民たち自身が使っている言葉でなすべき、と確信した。それゆえ、各地で翻訳できる者をみつけ、聖書を住民たちが読める言葉に訳させた。そうやって、自分がしてきた伝道活動を土地の人に引き継がせたのだ。

ワルドは多くの弟子を作り、厳格な規律を課した。そしてローマカトリック権力に拷問を受けても所説を変えない「頑固な異端者（カトリックからしたら）」に育て上げ

た。それまでにカトリック権力から拷問された人の中で、彼らほど頑固な異端者はなかっただろう。

彼らはカトリック教団勢力に攻撃されて、アルプス山脈の洞窟や谷間に逃れ住んだ。だがローマカトリックが迫害行動に疲れてくると、街に出てきて自らの信ずるところを説教した。今日もワルド派の人々は一万五千人ほどいる。

【ワルド派の思想】

ワルド派のおきてや原則をひとまとめにして示すのは難しいことだ。彼らの信条は一樣ではないからである。

教師や説教者や監督者には、カトリックのやり方をそのまま援用するグループもあった。かと思うと会衆主義的な運営形態をとり、高度に福音主義的に（新約聖書の聖句を中心とするやりかたで）活動する集団もあった。この人たちは化体説かたいせつを否定した。

（訳者註）

化体説とは、教会での聖餐式でパンと葡萄酒をイエスの肉と血であるとして食す

ると、信徒の身体のうちでそのようなとする説。

またカトリック教会の言う秘跡ひせきも彼らは全てみとめなかった。幼児洗礼も否定した。彼らはスイスやドイツに、まるで水が浸みだしていくかのように出て行った。そしてアナバプテストと呼ばれていた人々に深い影響を与えた。

(訳者註)

秘跡という語は、「心に与えられる恩寵おんちようの、目に見える有形なしるし」を意味している。カトリックでは洗礼、堅信、聖体、婚姻、告解・悔悛、叙階、終油しゅうゆを七秘跡としている。

【アナバプテスト自由吟味者】

(訳者注)

アナは「再び」バプテストは「洗礼者」で、言葉の意味は「再洗礼する人々」。

アナバプテストは極左の宗教改革運動家だった。彼らは風に乗って種として舞い散る、流浪の種子だった。また、ローマカトリックの農地に生える毒草（カトリックからしたら）でもあった。かれらはいたるところで予期せざる形で突然芽を出した。

彼らに敵対する者は、はじめは笑いとはしてすまそうとした。だが、まもなくそんな甘いものでないことを悟った。アナバプテストは、単なる笑いのものを超えた危険人物だったのだ。

彼らは共産主義、平和主義、死刑廃止を唱道し、幼児洗礼を聖書に反するとして拒否し、魂と良心の自由を力説した。また、教会と国家の分離を要求し、法廷での宣誓を拒否した。官職に就くことさえをも拒否し、納税と金利にも反対した。まさに極左中の極左だったのだ。

彼らは単にカトリック国教会にとつての異端であるだけでなく、国家への反逆者でもあった。法王も君主諸侯も、火と剣を手にして彼らを追いかけ回った。プロテスタ

ント宗教改革の大物もみんな彼らを非難した。

【ドイツ農民戦争とアナバプテスト】

ドイツに農民戦争が起きた一五二五年、アナバプテストはそれに加勢した。そのときルターは彼らを呪い「たたき殺し、絞め殺し、突き殺せ！」という、なんとも無慈悲な叫び声を上げた。まあ、彼の気持ちはわからないでもない。ルターは自らの宗教改革運動の最中に内戦が起きることを、何よりも恐れたのだ。

だが、アナバプテストの行動原理に照らせば、とるべき行動は「加勢」となる。彼らはこのヒューマンライツ（人権）に関わる大動乱を目にしたら、抑圧された側に加勢しないではいられなかったのだ。

ルターはたしかに偉大ではあった。だが彼の意識の中では、教会は「国家という花馬車の車輪につながれた機関」だった。アナバプテストはそれが我慢できなかった。だから小作人とともに戦ったし、ルター派やツィングリ派（宗教改革運動の一派）と袂を分かつて、孤立の道を歩んだ。彼らは独特の精神遺産を守り、「勝利か、さもなく

ば死か」の決意で自らの企てをしたのだった。

【スイスのアナバプテスト】

スイスのアナバプテストは穩健で思慮深く、学究的だった。指導者たちの姿勢も建設的だった。聖書を最初にドイツ語に翻訳したのは、世上ルターということにされているが、実はそうではない。ルターが翻訳を目論む何年も前に、彼らは旧約聖書のドイツ語訳をつくっている。そしてスイスを迫害で追われた時には、モラビア（旧チエコスロバキア中部のモラビア地方）で著作し説教している。

【イタリアのアナバプテスト】

イタリアで活躍したアナバプテストは短命だった。おそらくカトリックのお膝元だったからであろう。彼らはポーランドに逃げ、そして姿を消した。

【オランダのアナバプテスト】

オランダのアナバプテストは、ウルトララディカル（超急進的）だった。メルコワー

ル・ホフマンをリーダーとする一派は、ミュンスターで過激な暴力行動を続けた。こういう狂信は醜態にみえるものだ。この行動によってアナバプテスト活動者全体に「恥知らずな連中」というイメージが出来てしまった。

なんとも報いのない行為だった。その結果、オランダのアナバプテストは破局的な戦争をし、流血の死に至ることになった。そして残った者は、メノナイト自由吟味者の群れに合流した。

【メノナイト自由吟味者】

そのメノナイトと呼ばれる自由吟味者に話を移そう。時代は十七世紀である。彼らは、いわゆるバプテスト（ジョン・スミスに始まる英国バプテスト）の直接の祖先だ。この自由吟味グループの指導者は、メノ・シモンズという人だった。彼はカトリックの僧侶だった。だが、一五三六年にアナバプテスト自由吟味者に転向した。

彼は人間の信仰と実践の基盤として権威あるのは、聖句だけだと確信した。バプテストマ（日本で言う洗礼）は、「信じる者だけが」受けられる特権だとした。教会の規

律は、職業の場においても、家庭生活においても、個人生活の全ての局面で厳格に実施さるべきとした。

この極端な行動規律はこつけいですらあったが、それはそれとして、メノナイト派の人々の性格を形づくった。いまでもそうだが、彼らは紳士的で、平和志向で、遵法精神に富み、美德溢れる人々になった。彼らはロシアの凍てつく土地を耕し、スイスの山々に登った。ライプチヒの街の通りやアムステルダム の堤防で、自らの信じることを説いた。

(訳者註)

アムステルダムは海面下の土地が多く、海水をせき止める高くて広い堤防が人々の通路や集いの場になっていた。

そしておそらくこの堤防の近くのどこかで、彼らは英国を亡命してきていた三人の分離主義者に対面しただろう。ジョン・スミス、トーマス・ヘルウィ、ジョン・モートンがその人々だった。

(訳者註)

分離主義者 (Separatist) とは、英国国教会の礼拝方式、活動方式に同調できなくなり、そこから分離して独自の方式を実施した人々。主導者には国教会の聖職者が多かった。英国王は彼らを国外追放した。

(2章 いくつかの自由吟味グループ 完)

3章 近代バプテストの誕生

【ジョン・スミス、自由吟味者に】

オランダのメノナイトは、この三人の分離主義者を大歓迎し、自分たちの信仰を一念に説教した。その説き方たるや、あたかも鉄をメノナイト刃物に鑄造するかのようなだった。

スミスは英国ではゲインズボロー地区の英国国教会司祭だった。ちなみにその地からさほど離れてないところがスクルービーだが、そこはブラッドフォードとブリュウスターの居住地だったところだ。

（訳者注）

二人はともに一六二〇年にアメリカ大陸に移住した人々の指導者。移住者は後にピルグリム・ファーザーズと呼ばれることになる。

スミスはその活動の仕方がよくないと、一六〇六年に英国王ジェームズ一世に国を追われ、オランダに亡命して来ていた。一六〇九年、彼はメノナイト思想に完全に感化されるに至り、完璧な自由吟味主義者になった。彼は自ら再洗礼し、ヘルウィもモートンもそれに続いた。

（訳者注）

再洗礼とは、産まれてすぐ授けられる洗礼（幼児洗礼）を聖書に則っていないとして、やり直させるバプテスマ（洗礼）。カトリックも英国国教会もこの幼児洗礼を行っていた。自由吟味者は、「信じた者にバプテストを授けよ」という聖句を守り、産まれたばかりの赤ん坊に「信じることなど出来ようがない」と幼児洗礼を認めなかった。また、幼児洗礼は額に水滴を垂らして行う「滴礼」という方式で行われた。自由吟味者は、これも聖書にある浸礼（全身を水に沈めて行うバプテスマ）ではないと否定した。こうした二重の意味で、自由吟味者は参加者に再洗礼をもとめた。

後にその地に彼らは、初の「英国全救済派バプテスト教会」を組織することになる。

(訳者註)

全救済派とは、イエスを信頼することによって救われる（死後、最後の審判で天国入りを許される）機会は今人類に与えられているとの聖句解釈をする人々を言う。これに対して、予定救済派とでもいうべき人々もいる。こちらは宗教改革者カルバンの「信じて救われるものは、生前に予め創造神に定められている」という聖句解釈に同調する人々である。カルバンのこの説は、予定説という名で有名である。

三人はこのように歩みをともにしてきたのだが、スミスが「みんなでメノナイト派に入ろう」と言い出した時に、その歩調は崩れた。ヘルウィとモートンはそこまではついて行けなかった。彼らは依然として「英国人」だったのだ。二人はスミスを「破門」した。

一人ぼっちになったスミスは一六一二年に世を去ったが、その年、後進者のために、信仰宣言書を書き遺している。そこには彼の確信が次のように記されている。

「行政者は職務上の理由で宗教や精神的な事柄に干渉してはならない。また、人に特定の形態の宗教や教義を強制してはならない。キリスト教の受容は各人の自由精神にゆだねるべきであり、行政は政治的事項だけに関与すべきである」

スミスはかくのごとくに、自由吟味主義の軍旗を掲げたままで死の門まで歩みを進めた。彼は最後まで節操の堅い自由吟味者であり続けたのだった。

ヘルウィとモートンは英国に帰った。彼らは、必要とあらば自らの信仰の故に被る迫害は潔く受け止めるゝという覚悟をもっていた。また、創造神の御旨にかなうのであれば、死ぬまでに幾人かの同調者を作ろう、と思っていた。

だが、彼らが迫害を受けることは、ほとんどなかった。母国の状況は変わっていたのだ。ジェームズ国王の宗教政策は、路線としては従来のもまだだったが、その迫害行為は和らいでいた。

一六一二年以降に激烈な罰を受けたものはほんの少数しかいなかった。それまでをみると、一五五〇年にジョアン・バウチャーが異端のかどで火刑に処せられている。

一六一一年にはエドワード・ライトマンが鉄棒に後ろ手に縛られて火刑に処されている。だがこの二つの年度（一五五〇年と一六一一年）の間には、火刑は実施されていない。またライトマン以後、英国では火刑死者は出なかった。

その間にも、命をかけて自らの信仰の証を立てたことによって、罰金を支払わされたり、国外追放された人はいた。むち打ちの刑にあたりたりした人は多数いた。だが自由吟味者に対して火刑を命ずるような烈火の怒りが、国王の心にわき上がることは、一六一二年以降にはなくなっていた。

それ故、英国人がメノナイト自由吟味派に転向するのは容易になっていた。おそろくヘルウィとモートンが帰国する以前にすでに、メノナイトの人々が英国中を伝道して回っていただろう。彼らの伝道の成果が派手に表立つことはなかったが、彼らが自由吟味活動のタネを蒔いたのは間違いないだろう。そしてそれが、その後のアナバプテスト自由吟味主義の成長のための土壌を造った……このことに疑いはない。

【近代バプテスト、英国に生成】

一六三八年にいたるまでに、「第一予定救済バプテスト教会」が英国の地に設立されていた。

（訳者註）

予定救済説とは、前述のように「生前に予定されていた者だけに、信じて救われる機会が与えられている」という説。この教会はそういう聖句解読に立っていた。「第一」は最初の、という意味。

一六四一年には、全救済バプテスト教会から枝分かれた人たちが、「正しい洗礼は浸礼のみ」という宣言をだした。

（訳者注）

洗礼（バプテスマ）の方法には大きく分けて二種類がある。一つは全身を水に沈める洗礼でありこれが「浸礼」である。今ひとつは額に水滴を垂らす方式で、これは滴礼と呼ばれている。

一六四四年に、バプテストたちは英国で自らの信仰宣言書を発表した。これは今日まで、何百万におよぶ自由吟味者の行動指針になっている。ここで彼らは自らを「アナバプテスト」と呼んでいるが、まもなくバプテストと略称されることになる。以後、世界に広く普及していくバプテストという名称は、史上初めてここに出現したのである。

英国史には、嵐の時代も静寂の時代もあった。その間バプテストの二つの分派（全救済派と予定救済派）は、各々独自の道を進んだ。各々が英国人の生活と人格形成に役立った。彼らの貢献は華麗にして豪華だった。

二つのバプテスト派は、各々一貫して独自の自由思想を維持した。そして英国人に、自由を愛する精神を、あらゆる局面でしっかりとたたき込んだ。自由を愛する精神については、英国人はバプテスト自由吟味者に負うところ多大なのだ。英国人がその恩のすべてを返しきることは、決して出来ないだろう。

バプテスト自由吟味者が英国にもたらした自由は巨大だった。その自由は、アルフ

レッドやヘンリーやアイアン・デューク(鉄の公爵:the first Duke of Wellingtonの異名)らのもたらした自由よりも遙かに超えて大きい。

(訳者註)

アルフレッドはアルフレッド大王(八四九〜八九九)で、デーン人の侵略から国土を救った国王。

ヘンリーはヘンリー四世(一三六七〜一四六三)で、英国ランカスター王朝の初代の王。

アイアン・デュークは「鉄の公爵」という意味。ワートルローの戦いでナポレオンを打ち破った將軍、初代ウエリントン公爵、アーサー・ウェルズリー(一七六九〜一八五二)のニックネーム。

【クロムウェルを指南する】

クロムウェルの推し進めた自由にも、自由吟味者は多大な影響を与えている。バプテストは、実はクロムウェルをコーチングしているのだ。一六四四年の「バプテスト

信仰宣言」はクロムウェル革命の序曲だった。それはこう述べている。

（前略）……創造神を礼拝する方法の制定者はイエス・キリストただお一人である……（中略）……だから行政者の義務は、人間に精神の自由を与えることであり（それが良心的な人間に対しては最も親切なことだ）……（中略）……また良心を持つた全ての人々を、あらゆる悪、中傷、抑圧、いじめから守ることである……（後略）

聖句自由吟味者は、自由を尊び、自由のためにいのちを捧げる精神を、先祖から受け継いできている。その彼らが、クロムウェルの軍隊に、群れをなして加わったのは自然な成り行きだ。これはドイツでアナバプテストが農民戦争に加勢したのと同じ現象である。

一七七五年当時クロムウェル軍のアイランド要塞には、次のようなバプテスト自由吟味者たちがいた。すなわち、都市の市長が十二人、軍の大佐が十人、大佐代理が三人、少佐が十人、中隊付将校が四十三人いた。またクロムウェルの娘はフリートウツ

ド大佐と結婚していたが、彼もバプテスト自由吟味者だった。

さらにクロムウエルとともに国王に対して戦ったバプテストが何千人といった。彼らは議会派清教徒として、チャールズ一世を断頭台に送るということまでした。これは、欧州大陸の国王たちを震え上がらせた……。

かと思うと、クロムウエルが勝利を収め権力者の座についた時には、自由吟味者は反対に回った。彼らはクロムウエル自身と長老派の人々の不寛容に対して反対したのだった。

詩人ミルトンもバプテストだった。彼も、勝者たちの不寛容に対し、次のようにして正義の怒りを爆発させている。

……長老という新しい名は、かつての僧侶という名を大げさに書き替えただけのものなのか。長老諸君は、異議を申し立てるとその人を非難する。図々しくも国内戦争を命じる。そして、キリストが自由に解き放ってくれたわれわれの

良心を奪い取る。諸君はどうして旧き階層制度でもって人を虐げようとするのか！……。

英国バプテスト自由吟味者は、クロムウェルが王座に就こうとすると反対に回り、王座を拒否すると拍手喝采した。彼らは人のためでなく、プリンシプル（原理）のために戦う人間だったのだ。英国への愛国者である以上に、創造神の王国（天国）への愛国者だったのだ。

【英国への膨大な影響】

自由吟味者の思想と文化は、英国に多大な影響を与えた。偉大なる人物、偉大なる行為が、英国にシャワーの如くに振り注がれた。英国バプテストの予定救済派と全救済派は、一八九一年に二つに合流するのだが、それ以前の別れたままの状態であっても、両派は英国に恩恵を降り注いだ。

国内で革命運動が起きると、バプテストから加勢する兵士が出た。この兵士たちは、

平和のために働く戦士だった。

バプテストの中からバニヤンが出た。彼はブラッドフォードの牢獄のなかで『天路歷程』を書きあげた。『失樂園』の著者ミルトンが出た。彼は盲目だった。ダニエル・デューフォーが出た。彼は『ロビンソン・クルーソー』を著作した。

名説教者も出た。アレクサンダー・マクラレン、A.C.ゴードン、ロバート・ホール、スパージョンたちだ。スパージョンは“無比の人”と呼ばれた。アンドリュウ・フラーも出た。彼は一七九二年に、故郷に英国バプテスト宣教協会を設立した。ウィリアム・カレーが出た。彼は近代宣教活動の創始者だ。

予定救済派と全救済派との各々から、貢献者を平等に出してみよう。まず、前者の予定救済派から。

その最大の功労者はカレーだろう。彼はインドを今日の姿にあらしめるために働いた。その貢献したところは、クリープやハステイングスの貢献を遙か超えている。彼が、英国の今日あるのになした貢献は、ジョンウエスレー（メソヂスト派教会の創始者

として有名……訳注）に勝るとも劣らないだろう。

全救済派からはどうか。

最大の功労者はロジャー・ウィリアムズだ。今日のアメリカ合衆国を作り上げるに
なした彼の貢献は巨大だ。もしこれまでの米国大統領を貢献度順に並べ、上位から
十二人がなした貢献を合計できたとしたら、彼の貢献量はそれに匹敵する。

（3章 近代バプテストの誕生 完）

4章 新大陸での近代バプテスト

(訳者解説)

ミードは次に、信教自由、思想の自由をアメリカ植民地に建設するに巨大な貢献をした二人の人物について書きます。

その一人であるロジャー・ウィリアムズは、敢然と理想を追い求める気迫に、天与の知性と体力及び財力が付加された人物です。彼は神学者にして牧者、そして雄弁な説教師でもありました。ロジャーは今のロードアイランド州の一部の地域に、信教自由社会を創設します。インディアンと仲良くなり、彼らから土地を購入しての設立でした。

その自由社会に逃げ込んできた一人に、ジョン・クラークというバプテスト牧師がいました。本書には詳しく記されておりませんが、ロジャーとジョンは今のロードアイランド州の地をバプテスト派の植民地とすべく、英本国にわたります。国王から法的な植民団設立勅許状を得ようとしての一六五一年の渡英でした。

勅許は容易には出ず、ロジャーは米植民地に帰りますが、ジョンは残ってなんと十二年間申請をし続けました。そして一六六三年に勅許状を得ます。彼はロジャーが開始した仕事を完成したのでした。

では本文に入ります。

【新大陸で嵐を巻き起こした男】

さて前章にその名を紹介したウィリアムズ、彼はまさに“嵐を呼ぶ男”だった。幼い頃から彼の心身は、環境に溶け込めなかった。そして彼の方も、溶け込もうとしなかった。ケンブリッジ大学をめざましい成績で卒業した彼に、複数の上質な英国国教会教区から聖職への就任依頼がきた。彼はその一つに就職した。

ロジャーはリベラルな教会人で、分離主義者だった。彼はそれを自慢にしていた。そしてこれが彼の苦労のもとになるのだが、ものごとを自分の心に秘めておくことが出来ない人間でもあったのだ。

その彼がアメリカ大陸に移住した。一六三一年二月の寒々とした日にボストンに上

陸した。大嵐が吹き荒れる航海を経ての到着だった。彼はその航海が気に入っていた。強風のデッキを歩くと雨は顔を打ち、風は彼の髪を巻き上げた。彼はボストン方向を凝視し、そこでなすべきことに思いをめぐらしていた。

ボストンは諸手を挙げて彼を歓迎した。名声が伝わっていたからである。「ロジャー・ウィリアムズは若き教職者で、靈感が豊かで、情熱があつて、素晴らしき才能の持ち主」という評判が、新大陸にも広まっていたのだ。

だが彼は同時に、独自の意志をもつタイプだった。自らの考えを口に出す性格でもあった。上陸するとすぐにボストンの僧職者と衝突した。彼は教会の現状に関する私説を披露した。同情心拔きの言説だった。

彼はボストンの教会に加わるのを拒否した。ボストンの教会は母国の英国国教会に近いレベルで腐敗している、と彼は見ていたのだ。

後に、セイラムの教会が彼を招聘した。彼はそれは受諾した。だが彼が出勤しようとしたその日に、ボストンの州議会が妨害に出た。それをする権限がないにも拘わらず、

妨害に出た。「この青二才反逆者のセイラム滞在は許可されない」というのだ。

そこで彼はプリモスにいつて二年間説教者をした。そしてその地で彼は、ナラガンセツト族インディアンの酋長たちと親しくなった。

一六三四年になると、セイラムの教会が再び彼を招聘した。今度は妨害は出なかった。セイラムの人々は穏やかな心持ちで彼を待っていた。ところが彼の説教が始まると、セイラムの人々は立ち上がり、彼に向かって目をむいた。

それは爆発的な説教だった。ダイナマイトを込めた神学理論だった。彼は教会と国家の問題について論じた。なんとも無謀なことだった。さらに「マサチューセツツ警察裁判所の権力が宗教的な問題を扱うこと」への疑問をも、彼は披露した。ボストン議会は忙しく動き、ジョン・コットンが告発書を提出した。

これに対してロジャーは「その通りだ、告発書に書いてあることは正しい」といった。だが同時に「この地に来ているピューリタン（清教徒）たちは、自分たちが生活している土地の使用特許状を国王でなく、インディアンたちからもらうべきだったの

だ」へと反撃した。

ロジャーは又、邪悪な人間が宣誓したり祈ったりすることに反対の意を表明した。それは創造神を拝して行う行為だからだ、という理由で反対した。さらに「旧き英国の教区議会から派遣された聖職者の説教を、人々が聞くのは違法だ」と主張した。「市の行政官の権力は、身体、財産など、人の外面的な諸事に対してのみ及ぶべき」とも言った。

ああ！ 他に考えること、言うことはなかったのか！ 彼は外面的にはピューリタンの衣服をまもっていたが、内面は自由吟味者だったのだ。

【信教自由村を創設】

セイラムの教会は彼を支持した。だが、マサチューセッツ州議会はロジャーを植民地から追放すべきと決議した。決議に従って行政官は、彼を船で英国に送り返す計画を立てた。船は彼を運ぶべく、ボストン湾に停泊していた。

ところが報告書にはこう記されている。「当局者が彼を連行しに邸宅につく三日前に彼はそこを出ていた。そしてロジャー・ウィリアムズが何処に行ったかを彼らは知

り得なかった」〜と。

その三日の間、ロジャーは森林深くわけ入っていた。そして旧友のナラガンセット族の酋長たちに会って土地を売ってもらっていた。それはモハサク川の河口の細長い土地だった。今のロードアイランド州の一部に当たる土地だ。

彼はそこに町を設計し、プロビデンス（「神意」という意味）という名を付けた。それは彼が森で何ヶ月か過ごした後に考え出した、よき名だった。まもなく彼の町は完成した。すると、町はピューリタンの町々から逃げ出してきた同志で充ち満ちた。清教徒地域で「反逆者」「不平分子」とされた人々や、さらにはそこから追放された者も数多く流入した。

彼らはウィリアムズと一緒にあって「植民地誓約」を書き上げた。それには「住人は過半数の意志に従うべし」とあったが、それは「市民生活上の事柄についてのみ」だった。この街を建設した目的をロジャーこう述べている。この町が良心の故に苦しめられている人々の避難所になることを私は望んだ。水面下で苦しむ同胞をみて、私はこ

の町をわが愛する友に贈ったのである……」〜と。

それが彼の意図だった。彼は、住民がプロビデンスの周囲で働くのを原則とした。そうやって「このような生活は実現可能だけでなく、最も実用的である」ことを、歴史上初めて世に実証したのだ。

同時にロジャーは、「人民の権利と意志のみをベースにして運営される」自由政府を創設した。それは王権神授説に打ち込まれた史上初のボディーブローだった。

(訳者註)

王権神授説とは、王の統治権は創造神から直接、王に与えられたもの、という神学理論。それは中世を通してカトリック教団が主張してきた教皇首長権（教皇は創造神よりこの世の統治権を与えられていて、それを王に授けるという神学理論）に對抗し、近代の絶対王権の論理的根拠となった。だが、ロジャー・ウィリアムズ of 思想はその王権神授説をも打ち壊すものだった。

彼は、政府と教会を完全に分離させ、政治的宗教的自由の諸理念を実施に移した。それは、欧州の子供たちがこの理念を学校で教わる、はるか以前のことだった。

この男は英国の政治激変によって米大陸マサチューセッツの岸に打ち上げられた、最も挑発的な分子とでもいうべきか。この人物は、プロビデンスとロードアイランドの創設者であるだけでなく、あまたいる社会建築家のなかで最も独創的な思想家でもあった。彼が創始した運動は、初期の植民地時代を通して、雪だるまが転がるようにしてその重量と力を増していった。雪だるまは、合衆国憲法の最初の修正（信教自由の原則を憲法に追加した修正条項……訳者注）に至って、最終的に休息したのだった。

ロジャー・ウィリアムズは、プロビデンスに來た時点では公式のバプテスト自由吟味者ではなかった。だが、まもなくこの問題に対処した。彼はホフマン氏によって浸礼（全身を水に沈めて行うバプテスマ）を受けた。ホフマンは彼を招聘したセイラムの教会員だった。次いでウィリアムズはホフマン氏に浸礼バプテスマをさずけた。他にも十人以上に彼は浸礼をほどこした。

彼らの群れは米大陸での初のバプテスト教会となった。というところが以後の米国バプテスト教会の母体になったと想像したくもなるだろう。だが、実際にはそうまではならなかった。プロビデンスのこの集会から新しい教会が枝分かれすることはなかったのだ。ウィリアムズ自身、生前にその地を去っている。

だが、そのことが彼の栄誉を曇らすことはいささかもない。栄誉とは、合衆国における信教自由のための戦いのパイオニアとしての栄誉だ。彼が一貫して主張した信教自由原理は、後の米国バプテスト五大原則を産んだ。そしてそれは最終的には、合衆国憲法における国家原理として実を結んだのだ。

【クラーク、ウィリアムズの偉業を完全化】

ロードアイランドには、貴重なバプテスト自由吟味者がもう一人いる。ロジャー・ウィリアムズの人物像があまりにドラマチックなので見逃しがちになるのだが、ジョン・クラーク博士がその人だ。

博士はロンドンの開業医だったが、アン女王が争いを引きおこした時に、ボストンにやってきた。アン女王は「激情の疫病神」とでもいふべき人で、ピューリタン説教者の説教を

公に批判するという大胆なこともやってのけていた。彼女はまた、自分の鋭い批判は、神からの直接の啓示を受けてのものだと、告白したりしていた。こういう公言は、ロジャー・ウィリアムズがかつてやった旧教会への批判と同程度に、やっかいなものだった。

王女は英国を出て米大陸ロードアイランドにやってきた。クラーク博士はアクイドネック・アイランドにある住居を彼女に提供した。そこはかつてウィリアムズがインディアンから購入した土地の中にあつた。

クラークはまた、礼拝を捧げる教会をお望みならば、ニューポートにある教会を世話しましょうかとも申し出た。この教会が最初からバプテスト教会だったかどうかは、明らかでない。だが、一六四八年までには、間違いなくそうなっていた。当時メンバーは十五人で、クラーク博士はその「聖書朗読長老」（聖日礼拝にその日の説教テーマとなる聖句を会衆に向かって朗読する長老……訳者註）だった。彼の朗読は素晴らしいと評判だった。

その彼が大仕事をした。一六五一年、ロードアイランドは彼を英国に派遣した。こ

の地への植民地設立認可状を、国王から得るための派遣だった。クラークは十二年間独りで奮闘し続け、ついに一六六三年、チャールズ二世が国王になった時に、勅許状を取得するに至った。

そこには、

「如何なる方法をもつてしても、人を宗教上の見解の相違によって苦しめたり、罰を与えたり、脅して心の平安を乱したり、喚問したりしてはならない」――という宣言が記されていた。それは「当人が市民社会の平安を乱さない限り」という条件付きではあったのだが。

クラークは特許状を携えてアメリカ植民地にもどった。友人たちの喝采に腰をかがめて応えた。帰郷後彼は、ロードアイランド州の代理知事を二年間勤めた。その後引退してプライベートな生活を送りはじめたが、一六七六年突然逝去した。旧友ロジャー・ウィリアムズがこの世を去る十五年も前のことだった。ジョン・クラークはウィリアムズが開始した偉業を完成させた人であった。

（4章 新大陸での近代バプテスト 完）

5章 信教自由国家の建設に向けて

（訳者解説）　　くピューリタン（清教徒）の基礎知識く

自由吟味活動の情報が覆い隠されてきた結果、漠然なままになっているものの一つに、英国ピューリタン（清教徒）の知識があります。それはこの章を理解するに不可欠な知識です。公式歴史の陥没を埋めておきます。

《ピューリタンという語》

ピューリタンというのは古代からある呼び名です。元来それは欧州大陸にいた自由吟味者たちを指すニックネームの一つでした。

当時の欧州でも、一般のクリスチャン（国教だったカトリック教会に所属した人々）は、現世の欲望との調整を取りながら教会生活をしていました。ところが、自由吟味

者たちは、ただ真理を知りたくて、欲得を離れて聖句をひたむきに探究していました。そういう姿は一般人の目には「純粹な奴ら」という風に映るものです。これはもう、人の心はそういう風にできているというしかないことです。その彼らを指して英語のピュア（純粹な）という語の意味を含んだあだ名「ピューリタン」があちこちで自然発生しました。「純粹野郎」といったところですね。彼らを含む自由吟味者は英国国教会の出来た英国に、欧州大陸から（ひそかに）大量に移住しました。

《国教会の聖職者のなかに発生》

英国教会は、国王ヘンリー八世が、それまで国教会だったカトリック教会の僧侶を追放し、その方式をそっくりそのまま受け継いで造らせた国教会です。カトリックの宗教活動は教理統一方式で高度に儀式化していました。その方式を踏襲した聖職者たちは、教会とはそういうものだと思ってやっていました。

ところがその彼らが、自由吟味者のスモールグループ活動に触れた。各人が聖句の意味を生き生きと深く味わっているのをみた彼らに、電気に触れたように反応するものが出ました。この人たちは、自由吟味者の真摯で知的躍動に満ちた姿や、霊

的な生き様に覚醒された。そして彼らの「知」は活性化路線に入りました。

すると国教会の運営方法に、聖句に沿わないものが見えてきます。人民統治のために必要な「世的な」妥協面も目についてきた。かくして彼らの心の内に、国教会への批判意識が高まりました。従来のイギリス国教会の教義と運営方式を「これは間違いだ！」と思う気持ちが激しくわき上がりました。

《内部改革ピュリタンが最初》

英国教会の司教や司祭は高い所得を得ていて、社会の名士で資産家でもありました。その彼らの胸中から、激しい批判精神が突如として噴火した。それはまず、国教会の内部改革運動となって現れました。彼らは国家宗教の運営体制に異議を申し立て、改革しようとした。財産など既得権益を失う危険、さらには身体の危険をも顧みず改革に身を投げかけました。

命知らずの内部闘争を激烈に行うものは、体制側から激しく弾圧されました。逮捕、投獄され、地位も財産も没収される者も出た。そうした姿が「純粋なもの」と人々の目に映らないわけがありません。かくして彼らにもまた、ピュリタンのニクネー

ムが与えられました。日本ではこの語は清教徒と訳されています。訳者はこれを「英国ピューリタン」ないしは「近代ピューリタン」と呼んで、古代・中世における欧州大陸のそれと区別しています。

《分離派清教徒》

最初の英国ピューリタンの改革運動は、あらかた粉碎されました。国教会は、なんといつても、国王を頂点とする国家の統治運営体制の主要機関です。軍隊など国家権力諸機関と連動している。こんな機関が短期間に大改革されることは起きえません。

するとピューリタンたちの奮闘が実らない中から、内部の改革を断念して国教会から分離独立して信教活動をするという聖職者が出ました。それに従う一般信徒もいた。一般人とて、国教会に所属しなかったら職業など様々な面で不利益を被ります。だが、聖職者に同調する者も少なくなかったのです。

これを見た人々は、また彼らにニックネームをつけました。セパラティスト (separatist) とかセパレーシヨニスト (separationist) がそれです。日本ではこれらを分離派清教徒、分離派ピューリタン、あるいは分離主義者などと訳しています。

国王は主導者を国外追放しました。その処分を受けてオランダに亡命したひとり、前述のジョン・スミスは英国バプテスト派の開祖だったわけです。

そして後に北米植民地への移住の道が開けたとき、分離派清教徒は今のマサチューセッツ地域に多数移住しました。その先頭を切ったのが、現在「ピルグリムファーザーズ」と呼ばれることになっている二百余名の人々です。かれらはボストン郊外のケープコッドに上陸し、プリモスプランテーション（植民地）を開きました。

これを契機にボストン地区への移住者が相次ぎ、ここは分離派清教徒が集中的に住まう植民地となりました。ミードのこの章は、そうした状況を背景としています。

《分離派ピューリタンは反動した》

ここで、留意すべきポイントがあります。それは英国ピューリタンは自由吟味活動にまでは至らなかった、ということです。彼らは、英国国教会の聖職者や信徒だったとき、自由吟味者の影響をともに受けて変貌しました。だが、自ら自由吟味活動をする地点までには至らなかった。ひとたび教理統一方式の豊かな家庭環境に生まれ育ってきた人々が、自由吟味者にまで跳躍するのはいかに難しいか。鹿嶋はそ

の姿が、彼らに如実に見られる様な気がします。

ポイントはもう一つある。自由吟味活動を身につけるところまで行かないと、その純化された精神は反動の動きをとる傾向を持つところがそれです。分離派ピューリタンは新天地で、従来より遙かに尖鋭化した、純粹で厳格な教理統一主義者になりました。ボストンはそうしたピューリタンの町になっていた（この地域には今でもその氣風が残っています）。この章でのミードの語りは、その背景を知ると鮮やかに浮かび上がってくるでしょう。

では本文にまいりましょう。

【近代バプテスト、攻勢に出る】

ロジャー・ウィリアムズとジョン・クラークの身の安全を保ったのは、ボストンとの距離だった。距離が遠いが故にマサチューセッツ州の法権力はプロビデンスにまでは及ばなかったのだ。

この地のバプテストたちは、もしもこの聖句自由吟味共和国に住み続けたら、みんな自由で仕合わせで楽な暮らしを続けられただろう。だが「バプテスト」であるが故に、彼らはそれが出来なかった。彼らは自らの大胆な人生原理に従って、敵のいるところにはどこへでも出て行つて対決せずにおられなかったのだ。

この時、敵はマサチューセッツ州にいた。彼らはその地に出て行つた。そこはプロビンデンスだったら無償で得られるものを、流血と苦しみを代償にして手に入れねばならない土地だった。

【バプテスト、ピューリタンと戦う】

そこでバプテスト自由吟味者は、ピューリタンと対決したのだ！ 不動の目的を抱いて圧倒的な力で戦う彼らの、インパクトは強烈だった。ヒンガムのトーマス・ペインターは自分の子が幼児洗礼されるのを拒否した。彼は縛り上げられ、むち打ちの刑に処せられた。

ヘンリー・ダンスターはハーバードの学長で、おそらく史上最も卓越した学長だった。

彼も我が子の幼児洗礼を拒否した。そのために彼はケンブリッジを追放され、裁判にかけられた。有罪宣告され、州議会から訓戒を受けた。事態のさらなる悪化は必定だったが、早すぎる死が彼を襲った。それによって彼は、かろうじてその被害に会わずに済んだのだった。

ニューポートのジョン・クラークとオバディア・ホルムズは、主日（日曜日）をリン近郊のバプテスト自由吟味者とともに過ごし、その家で礼拝を行った（これは「家の教会」と呼ばれる……訳者注）。彼はそのかどで、逮捕され、重い罰金を科せられた。支払えない時には「重いむち打ちの刑に処する」と宣告された。

これを哀れんだ人が、クラークの罰金を代わりに支払った。だが、ホルムズはひどくむち打たれた。むち打ちはボストン通りで無慈悲に行われた。見ていた群衆に気分が悪くなる人々が出た。けれどもホルムズ自身は、全くひるむことがなかった。

ホルムズが郵便局に行く途中の道で、ジョン・スピアとジョン・ハゼルが彼と握手をした。するとこの二人に、各々四〇シリングの罰金が科せられた。これはバプテストに飲ませた、強い懲罰の薬、苦い胆汁の薬だった。

このような仕打ちを、ピューリタンは戦略として入念に組み上げていた。それは自由吟味者の「ばかげた」清教徒からすれば「行動を鎮圧するのに、功を奏するはずだった。だが、結果は成功しなかった。最も苦い胆汁を飲まされても、バプテスト自由吟味者はレホボスに教会を造った。ボストンにも作った。

ボストンに自由吟味活動の教会を造るなんて！ それは鷹の巢の隣に、無知な鶏が巢を作って、雛を孵えそうとするようなものだった！ 実際、清教徒の地・ボストンの人々は仰天し、次いで怒り狂った。彼らは、都市警官に変装してバプテストの教会に來襲した。そしてこの「異端者」たちの集会所のドアに、釘を打ち付けて開かなくしてしまった。表に警告板を付け、こう書いた。

「バプテストたちがここで集会を開くことを禁じる。如何なる集会も禁じる。このドアを開くことをも禁じる」と。

で、バプテストは従ったか？ 従った。「集会を開かない、ドアを開けない」ということには……。だが彼らは一週間後に釘を引き抜いてしまった。それとともに、彼ら

を襲う行政権力の情熱も又、引き抜かれてしまった。州議會は最後のカードを切ったつもりだったが、やはり成功しなかったのだ。それでもつてバプテスト自由吟味者の進撃を止めようとする努力は終焉した。ピューリタンの祭政（政教）一致方式は崩壊した。ボストン市民たちは、むち打ち刑と追放の場面に食傷していたのだ。

一六九一年に国王ウィリアムとメアリーが新憲章を容認した。それは「マサチューセツ湾とプリモスをまとめて一つの植民地とする。そこでは全てのキリスト教徒に良心の自由をゆるす。ただしバプテストは例外とする」——というものだった。

これは自由についての条例と言うより、むしろ黙認（自由吟味活動を）することを暗示した条例だった。この憲章は一八三四年まで有効なままだった。

【自由吟味圏、拡大する】

バプテスト自由吟味者は慎重かつ用心深く行動した。その結果、雪だるまが転がって大きくなっていくかのようにして、力を増していった。彼らはボストンを中心に、そこから前線を押し広げていった。

ニューヨークには、“かんしゃく持ち”との異名をもった、ピーター・ステイーブサントという老人がいた。彼の指揮下でしばらくの間、迫害があった。だが、まもなくバプテスト教会が出来始めた。ニューアムステルダム、グレーブサンド、フラッシング、オイスター湾岸といった地域に教会ができていった。

ペンシルバニアでは、ことはスムーズに運んだ。この地にはウィリアム・ペンのもとで、最初から力強い「自由志向の意識」が出来ていた。この意識は他の地域にはないものだったが、ここにはあったのだ。

(訳者註)

ウィリアム・ペン (1644-1718) は、英国のクエーカー教徒で、ペンシルバニアの創始者。クエーカー教徒も聖句自由吟味方式を採る一集団。

そのペンシルバニア地域で信徒が知識を互いに教え合うために、「総会」が五月と十二月にもたれた。それは信仰深い集会で、新約聖書中心の福音的なものだった。ニューヨークとニュージャージーから説教者が呼ばれていた。一七〇七年まで、個々のバプテスト

教会は総会に代表者を送り続けた。そしてその年、初のバプテスト連盟がつくられた。そうした動きのなかで、フィラデルフィアは自然にバプテスト活動の中心地となった。「連盟」はしばらくすると植民地諸地域のなかで最も影響力の強いバプテスト団体となった。その地位は以後も変わることなく続いた。

バプテスト連盟は、一七四二年に自分たちの神学理論を明示した。それはアメリカ大陸におけるバプテスト自由吟味活動の全体像を描くための神学だった。同じ年に、連盟は信仰宣言書（告白書ともいう）も作成した。それはとてもカルバンの（予定救済説的）なものだった。この事態は一つの転換点を作ったと言っていいたいだろう。従来、バプテストの神学理論には、全救済説の色彩が非常に強かったからだ。

この頃、南部方面でも事件が起き始めていた。バージニアで一つの方法が議会を通過したのだ。それは自分の子の幼児洗礼を拒否した親には、タバコ二〇〇ポンド分の罰金を科すというものだった。この法律を含むところは重大だった。それは最初は人間の手くらの大きさの、雲のようなものだったが、速やかに拡大して嵐になった。

その嵐はバージニア州をこえて、アメリカ植民地全土に広がった。

【大覚醒運動】

ところがこの動きがあるなかで、いわゆる「大覚醒運動(the Great Awakening)」が起きた。

(訳者注)

大覚醒とは町や村のちまたで交わされる聖句解釈激論の波紋が、霊的現象も伴って急速に広がっていく宗教復興現象。激論は、ケンタッキー州でのものが最初と言われているが、すぐに多くの地点で急拡大した。拡大する際には、名説教者が大きな役割を果たすことが多かった。

米国では歴史的にこの現象が一度ならず波のように起きた。通常口伝されてきているのは、次の三つの波である。

第一次（一七三〇年代～一七五〇年代）、

第二次（一八〇〇年代～一八三〇年代）、

第三次（一八八〇年代～一九〇〇年代）

著者ミードは本文で、そのうちの第一次大覚醒を語っている。

この大運動が始まる時には、メイン州からフロリダ州にわたる地域にバプテスト教会は四七あった。北部には当時バプテスト教会は七つしかなく、その勢力は諸教派の中で最も弱小だった。教会員は全部合計しても五〇〇人しかいなかった。だがそのとき、ジョナサン・エドワード（1703-1758）とジョージ・ホイットフィールド（1714-1770）が覚醒運動を始めた。彼らは、新約聖書重視の教会活動を主張した。この活動は、未信仰者の靈感を一気に開花させた。そして全ての新約重視の教会の成長機会を、切り開いていった。

（訳者註）

エドワードは神学者にして説教者。インディアンへの伝道者でもあった。名説教で大覚醒の火付け役をした。ホイットフィールドは英国出身の巡回説教師。彼も大覚醒の火付け役となった。

【正規バプテストと分離派バプテスト】

だが、奇妙なことに、バプテスト教会はこの大覚醒活動の成果に、当初は距離を置いて超然としていた。多くのバプテスト教会は、ホイットフィールドやテネント父子たちに対して、門戸を閉じていたのだ。

(訳者注)

テネント父子とともに長老派の牧師だが、教団組織の制約にとられず、激しく霊的な説教をした。

その結果、大覚醒して信仰の火に燃えた群衆は、まずは教理統一教会である組合派教会や長老派教会に殺到した。だが、教理統一方式は教団教理への従順を求める。結局、彼らの情熱を許容し続けることは出来ず、群衆はバプテスト教会に来るべくしてやってきた！

だが、この改心者の熱い心に対して旧来のバプテスト教会は鈍感だった。何千人と

いう人が、悔い改めて信仰に目覚めて（靈的に覚醒して）やって来たにもかかわらず、これら回心者たちに冷淡だったのだ。にもかかわらず回心者たちはバプテスト教会の扉をこじ開けてなだれ込んだ。教理統一教会を飛び出して、強引になだれ込んだ。磁石に引きつけられる鉄の如くに流入した。バプテスト教会内部で「旧き光」と「新しき光」との衝突が起きた。

そしてそこから、新しい一派が生まれた。分離派バプテストがそれである。

（訳者註）

分離派バプテストとは、旧教会から新しく分離してきた新参バプテスト自由吟味者という意味。かつての分離派ピューリタンの名にちなんだのであろう。

新参者の数は膨大だった！ 他教会の全ての会員が脱会してバプテスト教会員になったわけではないのだが、その数は膨大だった。その結果、それまで軽蔑され軽視されてきたバプテストたちは、いまや注意して扱われるべき勢力となった。こうした形でバプテスト教会では、意図せざる大覚醒ブームが起きてしまった。この時、以前

よりバプテスト自由吟味者だった人たちは、自らを正規バプテスト (Regular Baptist) と称した。そして新参者を分離派バプテストと呼んで、自分らと区別したのであった。

【分離派バプテスト、躍動する】

その分離派バプテストたちは、米国聖公会（英国国教会の米国支部……聖公会は英国国教会のもう一つの呼び名）から米国の南部地域をもぎとった。それは、アメリカ植民地がイギリス王国からの分離独立を実現しつつあった、まさにその時期のことであった。一七七五年から一七九五年にかけて、植民地独立軍は進軍を続けていたのだ。この時、バプテスト自由吟味者たちの戦いは、最高潮に達した。それは平等と存在認可を求める戦いだった。大覚醒して信仰に燃えた分離派バプテストたちは、大挙してバージニア州に突入した。

バージニア州は聖公会の地域だ。米国聖公会は、彼らの要求に断固として反対した。直ちに衝突がおきた。南部の聖公会はバプテストたちを襲撃した。キリスト教会がキリスト教徒を襲撃したのだ！ これはアメリカ教会史で最も汚らしい出来事だ。全

植民地の歴史においても、弁解しようのない事件の最たるものである。

【熱血弁護士。パトリック・ヘンリーが救済する】

一六〇六年に出された最初の植民地憲章は、礼拝を英国国教会の儀式と教理に従ってなすべきこと、と定めていた。それは強制だった。次いでバークリーがやってきてひどい法律をいくつかつくった。

(訳者注)

ジョージ・バークリー (1685-1753) はアイルランドの哲学者、聖職者。

一七二九年アメリカ植民地に渡り、植民者と北アメリカ先住民の教化のための大学を作ろうとして失敗し、一七三一年に英国に帰国した。

暗黒時代がやってきた。この時代は最初の連邦議会が開かれる時まで続いた。その間、バプテスト自由吟味者たちは牢屋から牢屋へと追い立てられた。彼らは、むち打ち刑場から地下牢へと、休む間も与えられずに引き立てられた。

ウィリアム・ウェーバーとジョセフ・アンソニーは、チェスターフィールド郡の牢屋にぶち込まれた。彼らは沈黙を守れと命じられた。だが彼らは独房の小窓の鉄格子を通して、壁の外の通りに集まった群衆に向かって説教した。

ジョン・ウオーラー、ルイス・クラング、ジェームズ・チャイルズは暴徒に襲われ、裁判所に引き立てられた。野獣のような目をした検察官が怒りの声をあげた。「裁判長閣下の御意にかないますように！ この男たちはどうしようもない平安の妨害者です。路で会う人すべての喉に聖句を詰め込んでしまします！」

形勢は彼らバプテスト自由吟味者に不利だった。だが、五〇マイル（八〇キロメートル）離れたところにいた若きスコットランド・アメリカン系の弁護士が、この裁判のことを耳にした。かれは米国聖公会員だったが、その精神は善良で正義感があつた。名はパトリック・ヘンリー。

彼は髪の毛の根元が真っ赤になるほどに怒り、馬で町に疾走してきた。頭上に起訴状を振りかざして叫んだ。怒りで検察官以上に野性的になっていた。「創造神の福音を説いてのことではないか！ 偉大なる創造神のために！！ 偉大なる創造神のため

に！！！！」

後年、彼は他の弁護活動でさらなる名文句を発することになる。

「われに自由を与えよ、さもなければ死を与えよ！」（がそれだ。

三人の説教者は無罪になった。

（5章 信教自由国家の建設に向けて 完）

6章 信教自由憲法ついに実現！

【流れが変わり始める】

自由吟味者の闘争は長期にわたった。それまでにない数のバプテストが、法廷に引き出された。そして多くが無罪宣告された。だが彼らの一貫した行動と不屈の精神は、徐々に人々の注目を集めはじめた。彼らの姿勢が、人々の同情を集め、協力を引き出していったのだ。

ジェームズ・マディソン（後の米国第四代大統領）が彼ら自由吟味者の味方になった。モンティセロの住人に、ジェファソンという名の男（トーマス・ジェファソン。後の米国第三代大統領）がいた。彼も裁判所に立ち寄り、自由吟味者を直に目にし、その言い分を聞いた。そして「バプテストが正しい」と言った。

郡の裁判官にワシントンという名の男がいた（ジョージ・ワシントン。独立戦争に

おける大陸軍総司令官で初代大統領）。マウント・バーノンの住人だった。彼も自由吟味者の姿と主張に感銘を受けた。これらの地域でバプテストへの共感が生じた。そして、人々のその気持ちちが、流れを変えていった。

一七七九年（米国独立宣言の三年後）、バージニア州議会が税法を変更した。「以後永遠に法定教会の僧侶の給与のために税金を取ることはない」というのがその内容だった。これは法定教会にとって強烈な一撃になった！ ある教会はよろめき、また他は倒れた。法定教会が倒れるごとに、バプテスト自由吟味教会が新たに頭をもたげた。ついでジェファソンが「信教自由を確立する法律」を起草した。マディソンがそれを積極的に支持した。後の一七八六年、それは合衆国憲法の中に法制化されることになる。

バージニア州は多くの大統領を輩出した、まさに「大統領の母なる大地」だった。この州が先駆的に成立させたこの法律は、合衆国の全州に波及し「教会と国家が完全分離した」国を出現させた。米国はこれによって、最も偉大かつ比類なき貢献を西欧

文明に対してなしたといっているだろうか。

だがこれはバージニアがなしたことなのだろうか？　あるいはバージニアのバプテスト自由吟味者がなしたものののだろうか？　判断は読者にゆだねよう。

【バプテスト、戦いの中で成長】

バージニアでの勝利によって、バプテスト自由吟味者の血管のなかに、さらに新しい血が流入した。次から次へと新事態が起きた。独立革命で米国聖公会は破壊的打撃を受けた。メソヂスト教会はほとんど壊滅状態になった。

その一方で独立戦争はバプテスト教会を成長させた。これは公正な結果だ。バプテストの方も、独立革命が成功するのを助けてきたからである。

ある観察者は（いわゆる「バプテスト・ウオッチャー」を指していると思われる……訳者註）こういつている。「バプテストたちは人間に対して忠誠を尽くしたのであって、英国王に対してではない。王党派には一人としてバプテスト自由吟味者はいなかった」とかと思うと「少しはいただろうが見つけるのが難しかったのだ」という者もいる。

どちらが正しいにせよ、ワシントンはいこう言っている。「バプテストたちは、ほとんどどこでも全員一致で働いた、市民の自由のための不動の友だった。彼等は栄光の独立戦争のための、一貫した助っ人であり続けた」

実際バプテスト自由吟味者はめざましい支援を独立戦争に与えた。その働きによって、彼らの抱くキリスト信仰の神髄が、一般人に広く知れわたった。また自由吟味者たちは、マサチューセッツやバージニアでの闘争過程で、自分らを投獄し鞭打った人々を、みな許した。

それだけではない。独立戦争中に、イギリス本国はヘッセン人の傭兵を使って戦いを挑んできた。その際、バプテスト自由吟味者たちは、昨日の敵（旧法定教会の人々）と一緒に戦った。そして共に傭兵の銃剣に刺されて死んでいった。

旧教会の人々は、かつて彼らを投獄や鞭で苦しめた張本人だった。なのに彼らに赦しの行為が出来たのは、バプテストが抱く「自由の大儀」が深いものだったからである。その深さが、かつて旧教会の人々から受けた傷や、その人たちへの恨みを忘れさせた

のだ。自由のために身を捧げようとする思いの深さが、旧敵に対しても尊敬と寛容の感情だけを産み、それをふくらませたのだ。

独立戦争が終わった時、バプテスト自由吟味者は以前とはすっかり違った別人になっていた。戦いの前には彼らは、迫害されっぱなしの小集団という印象だった。だが戦の後には、自分たちのプリンシプルをこの大陸の法律の中に具現すべく、先頭を切って走るランナーに豹変していた。

バプテスト自由吟味者は、それほどに豊かで影響力ある集団となっていたのだ。いまや彼らの数は多くなり、その行動は積極的になっていた。加えて彼らは、一般の人々にとって魅力的なスローガンを持っていた。この当時の一般人も、より高みを目指して進もうという気風に満ちていた。

【憲法成立を主導する】

バプテスト自由吟味者は、ひとときの勝利の輝きのなかに安住することはなかった。彼らはいまや賢明にもなっていた。この新国家がそのままで民主国家として安定する

ことはない、と洞察していた。英国勢力は去り、英国国教会は崩壊状態にあったが、それでも新国家は依然として不安定だったのだ。

諸州は連携して合衆国連邦を形成した。それをみるとバプテストは、次の課題は憲法の制定だと洞察した。草案が数州で批准にかけられると、彼ら自由吟味者たちは、その草案が「教会と国家の分離」をうたっていないことを知った。多くの州が、「後で信教自由の条項を追加する」という約束はしていたが、当初の法案にはうたわれてなかった。だから満足はできなかったのだが、まず憲法が成立しないことには何も進まない。バプテスト自由吟味者は、とにかく憲法案を支持しようと、賛成票を投じた。だが実際にその法案を各州が批准する段階で困難が生じた。諸州は互いに他の州の有利な点をうらやんだのだ。中央に連邦政権をおくことにも否定的だった。

激論の結果、とうとうマサチューセッツとバージニアを枢軸州にし、この二州に決定権を与えて論争の帰趨を決めようということになった。それはまたこの二州で草案が通らなかつたら、全ては水の泡ということでもある。ところがマサチューセッツは、

先に議会投票をした州に同意するといつて、バージニア州に先をゆずってしまった。かくして全てがバージニアの決定にゆだねられることになった。

さてその州バージニアでは、オレンジ郡の州議会議員の一つの椅子を、後に米国第四代大統領となるマディソンとジョン・リーランドが争っていた。対抗馬のリーランドはバプテスト派の長老だった。オレンジ郡では圧倒的にバプテストの数が多く、教会長老の有利は固かった。選挙前に、マディソンの劣勢が明らかになった！ マディソンに勝ち目は全くない。リーランドにもそれはよくわかった。

だがこの草案の批准が通るには、議会にマディソンがいることが必要だった。マディソンのあの「黄金の声」と政治的影響力がなかったら、憲法案は通らない。リーランドは勝利を手中にしながら選挙戦を降りた。マディソンは無投票で当選した。

歴史の本に書かれているのは、その後の残りかすのようなところだ。そこではマディソンは「アメリカ憲法の父」ということになっているが、彼は本当に父なのだろうか？ リーランド長老については我々はどう書き残すべきだろうか？

【憲法修正で信教自由を確立】

バプテスト自由吟味者は、憲法の成立に安住しなかった。彼らは憲法の批准がなるとすぐに、いたるところで憲法改正についての議論をし始めた。一七八八年、バージニアのバプテストは総会を開き、「新憲法は信教の自由を守るために十分な条項をもっているか」について議論した。彼らは自分たちでこのテーマをたづね話し合い、かつ、マディソン氏とも十分話し合いをもった。そしてこのことについて、ワシントン氏とじっくり話し合うべきだと代表団を首都に送り込んだ。

ワシントンはそのときには大統領になっていた。彼はバプテスト自由吟味者たちを、心を込めた、同情溢れる姿勢でもって迎えた。大統領の要請で、上院はバプテストたちの言うことを優先的に考慮した。その結果、第一修正条項の最初の行にはこう書かれることになった。

「上院は、宗教団体の設立に関して法律で規制したり、宗教活動の自由を禁ずる法律を作ったりしてはならない。……」

これで成った！ 信教自由はついに永久に成った。以後、今日の我々まで、そのための戦いをしなくてよくなっている！ 戦いはロジャー・ウィリアムズやジョン・クラークの後を継ぐ者たちによって戦われた。彼らは我々のために戦ったのだ。現在、バプテスト自由吟味者は総勢一七〇〇万にのぼる。その子孫たちは今後、祖先の偉業が決して消えないことを知るだろう。

（6章 信教自由憲法ついに成る 完）

7章 連合会創設と西部への宣教

【連合会の必要性増す】

一八〇〇年一月一日時点において、バプテスト教会の数は一一〇〇個に、教会員の数は十万人になっていた。だが今日のような州規模の連盟は、当時一つもなかった。

バプテスト自由吟味者は、

レギュラー・バプテスト、

フリーウィル・バプテスト、

セブンスデー・バプテスト、

シックスス・プリンスプル・バプテスト

の四つの派に別れていた。それらをまとめる超教派全国組織は、存在していなかった。小さな地域の、断片的な「連盟」は、いくつか存在していたのだが。

そうした小規模連盟の多くは、対外宣教活動に対して、明白に反対姿勢を表明していた。教会員が加速度的に増大し、それどころではなかったのだ。たとえば教会堂のスマールグループ活動用の小部屋が足りなくなっていた。無理に詰め込んだら、壁が内側から押されて壊れそうになるくらいだった。

バプテスト教会が膨張する直前には、合衆国は西部方面に突進するかの如き進展を開始していた。この頃のバプテスト信徒の姿は、訳がわからないままで突然大人扱いされ始めた不器用な若者に喻えられる。自分がどういう力をもっているかが、わからないのだ。これは新規採用された屈強な軍人たちが、個々バラバラで野営テントにいるような状態にも喻えられる。とにかく彼らには、全員を連携・結束させる何かが必要だった。

【宣教連盟を結成する】

そして……彼らはそれを得ることになった。一八二二年、偉大なる老軍艦コンスティテューションが、海上で英国の戦艦ゲリエールを搜索していた。そのとき、軍艦に比

べたらみすばらくみえる二艘の客船が、インドに向けて航海していた。デッキには初のアメリカ人宣教師と教理統一教会のゝが近代軍人の如き姿で乗船していた。アドニラム・ジャドソンとルーサー・ライスはその人だった。

彼らは積み藁を世話するボランティアとして、カルカッタに向かっていた。そしてカルカッタで彼らは、バプテスト自由吟味者の話を聞いて、バプテストに転向した。

ライスは帰国後、自らの転向体験をバプテスト教会を回って語って歩いた。自由吟味方式を伝える宣教活動の大切さを説き、支援を要請した。彼は全国を遊説し、消えかかっていた昔の宣教の情熱をあおった。

彼は素晴らしい活動報告をした。話し方をよく知っていたのだ。バプテスト教会は反宣教主義の穴倉から出てきて、ライスを支援するようになった。勢いづいたライスはバプテスト教会に宣教の大義を与え、人々を奮い立たせた。こうして国中に宣教団体を造っていった。若き巨人、バプテスト集団は、こうして自らの力を自覚し始めていったのだ。

むかし、利口なフランス国王がこう言ったことがある。「国内に革命運動が育ってきた

ら、外国との戦争をあおれ」と。そうすると人民の意識は外に向かって高揚し、国内での革命熱は下がっていく、というのである。この対外戦争に向かう人民に似たような心理が、バプテスト教派内で働いた。その仕掛け人がルーサー・ライスだったわけだ。

こうした努力によって、一八一四年までには、バプテスト自由吟味者の海外宣教連盟が活動状態に入っていた。「バプテスト教派海外宣教米国総会」というのがその名だった。名前も長かったが組織も大規模だった。連盟は三年ごとに総会を開催した。人々はそれを「トリエニアル（三年毎の）会議」と呼んだ。

この総会から良き果実が生まれた。海外宣教協会だけでなく、国内宣教協会もできたのである。加えて

バプテスト出版協会、

アメリカバプテスト歴史学会、

教育協会、

若者連盟

も出来た。活動を多様化するために、神学校もいくつか設立された。

トリエニアル会議は緩やかな連合体だったが、バプテスト自由吟味者の活動にリズムとアイデンティティをもたらした。言ってみればそれはドラムだった。人々はその上でそろって足踏みし、それをたたき、リズムカルな行進をしたのだ。

総会はまだ「自分たちは一つの教派を形成している」という意識を、バプテスト自由吟味者の心に作った。この意識は、前々から強く求められていたものであった。

【西部フロンティア宣教に乗り出す】

その頃アメリカ合衆国の西方のフロンティアは、躍動するかの如くに西漸運動が続けていた。バプテスト自由吟味者は、そのフロンティアを追うようにして西に進み、開拓住民を真理の言葉に導いた。

西部の無人地帯に「硫黄の」ダニエル・ブーンと呼ばれた荒れくれ男がいた

(訳者註)

ダニエル・ブーンは米国の開拓者。特にケンタッキー地方を開拓した。

この地にはブーンの名を持つ「素封家」が複数いたが、彼はその一人だった。その弟もそうであって、彼は同時にバプテストの説教者でもあった。若きアブラハム・リカンカーン（後の米国第六代大統領）の両親もバプテストだった。母は信仰堅き自由吟味者であり、父はビジョン・クリークでのバプテスト教会建設を援助した。

バプテストは無人の荒野にも馬で踏み込んでいった。荒野には、ぽつんと孤立して存在する町もあった。通常そこは乱暴者の多い無法地域だ。だが、彼らはそこにも入っていた。ケンタッキー、オハイオ、インディアナ、イリノイ、アイオワなどの新しい州では、例外なくバプテストの宣教者が説教し、集会所を建設していった。

彼らはどんな地域にも向かった。そこに酒を飲んだのどんちゃん騒ぎ、喧嘩、賭博、殺人、馬泥棒、競馬（競馬は馬泥棒より悪いとされていた）があれば、彼らはそれと戦い、組み伏せた。厳格な規律で抑え込んだ。孤立しても、法と秩序を押し立て続けた。怒声、いやみ、毒気の根も抜きとった。

バプテストが荒野の小道に立ち寄れば、そこに教会が残った。それ以後、それらの教会は活動し続けた。

【教会員への姿勢】

ケンタッキー州にあつたサウス・エルクホーンという古い教会の日記帳には「ロバート・ヒックリンは競馬をしたかどで教会を除名された」と記されている。またこういうものもある。「ポリ・エドリントン姉妹に告発がなされた。件名は、数人の隣人たちが互いに口げんかするように仕向けようと、告げ口し回ったことである。彼女はその件で除名された」と。

（訳者註）

キリスト教会では、女性会員の名に「姉妹」をつけて呼び、男性会員の名には「兄弟」を付けて呼ぶ。

さらに「以前ウィリアム・フィッツジェラルドの奴隷だった黒人教会員のモリー

もまた除名された。理由は嘘をついたことである」――という記録もある。

けれども、当人が正直に悔悟した時には、フロンティア地域のバプテスト教会員たちは哀れみ深く応じた。ケンタッキー州のマウント・タボル教会のアーネット姉妹は、飲酒のかどで召喚されたが、教会日記には「彼女は謙虚な姿勢で自分のしたことを謝罪したので教会は彼女との交わりを復活させた」――と記されている。

【巡回伝道者】

西部開拓地とは、アルゼニー山脈から太平洋岸にいたるまでの全域をさす。福音がそこにあまねく行き渡るには一〇〇年の歳月がかかった。そしてそれは、巡回伝道者の働きなしには実現し得ないことだった。

巡回伝道者の中には、時によっては凶暴になるものもいた。文字の読めないものもいた。よごれた身なりの者、唇にタバコのやにつけた者、舌がアルコールで腫れ上がった者もいた。そうした人物も含めながら、巡回伝道者の総集団は、多くの魂を救っていった。彼らはフロンティアに住む「ガラガラヘビたち」に対峙し、その罪の毒牙を抜きとった。こうした野人の心に平等感を植え付け、米国に民主社会の土壌を作った。この働

きで、西部開拓地はついに“オールド・ヒツコリー”をホワイトハウスに送り込むまでになったのだ。

（訳者註）

“オールド・ヒツコリー”は米国第七代大統領、アンドリュー・ジャクソンのニッ
クネーム。

これらはバプテスト教会の輝かしき面だが、そうでない面もあった。牧場の羊が囲
いを破って大量に脱出するような事態も起きたのだ。

（訳者註）

羊とは教会員のこと。キリスト教界では一般信徒を羊と呼ぶことが多い。

一八二五年から一八六五年までの間に、おもだった教会を出て小教派をつくる動き
にでた信徒の数は、膨大だった。だが大教会は、それをもちこたえて存続した。教会

を脅かしたこの分裂動向を耐えきったことは、バプテスト自由吟味者がなした、一九世紀最大の功績だろう。

分裂運動は大会にとつては災害的で、破壊的なものだ。それには次のようなものもあった。一つは、ハードシェル運動である。これは自己の信仰の純粋を保つためには、外部者との交わりを避け、堅い殻に閉じこもるべきと主張した運動だった。

デイサイプル（弟子）運動というのもあった。これはキャンベル牧師に率いられたもので、「信徒はイエスに直接教えを受けた弟子たちのようになるべき」として厳格な訓練を課す活動だった。

バプテスト連盟の南北分裂もあった。これには南北戦争も追い打ちをかけた。

これほど多くの面から乱打されたら、バプテスト自由吟味者はちりじりバラバラになる。誰もがそう予想するだろう。ところがなんと、彼らはこれらによつてさらに力を付けたのだ。

ハードシェル運動は、カルバンの予定説神学を従来より一層厳格に解釈して賛同者を得た。キャンベル主義者たちは、キリスト信仰への転向や、バプテスマ（洗礼）に

関して独特の見解を展開して歓迎を受けた。これらの運動に賛同して母教会から脱退して転入してきた教会員は二〇万人にのぼった。これは掛け値なしの数字である。

けれどもこれらの動きが出た母教会の方も一八四五年でみると、南部で一二六パーセントの会員増を達成している。また全国での増加率は、プラス一七五パーセントとなっていた！

(7章 連合会創設と西部への宣教 完)

8章 連合会、南北に分裂

【奴隷問題をめぐって分裂】

この一八四五年という年は、バプテストにとって忘れたくない年でもある。このときバプテスト連盟は奴隷問題をめぐって二つに分裂したのだ。その前年、バプテストの総会で次のような主旨の発言が出た。「奴隷所有者が宣教師になりたいという希望を出して、なおかつ奴隷を自己の財産として保有し続けるという場合、我々は宣教師認可を出すわけにはいかない」と。

南部のバプテストは、もはや抗弁しなかった。彼らは一八四五年五月に全国連盟を脱退し、南部バプテスト連盟（サザンバプテスト・コンベンション）を創設した。

ああ、こんな大分裂を、創造神はどうして回避させてくださらなかったのだろう！南北戦争というあの恐ろしい過ちを、どうして避けてくださらなかったのだろう！こ

んな内戦は絶対に、絶対に、おきてはならなかったのだ。だが起きてしまった。そして以後三〇年間にわたって、南部は敗北感の塵の中に埋没してしまった。

けれどもそうした中でも、聖句自由吟味活動の灯は消えなかった。南部では一八八〇年までに、バプテスト自由吟味者が一、六七二、六三一人存在するようになった。全米では二五〇万人になった。国民同士が殺しあったにもかかわらずである。新しくバプテストになった人は、北部南部を合わせて一、三三七、三九九人になっていた。

【和解努力の副産物】

バプテスト自由吟味者は現在も南北分裂したままだ。和解の努力はなされたが、実らなかった。だが、その間に「アメリカンバプテスト連盟とサザンバプテスト連盟のための公共問題合同委員会」がワシントンDCで開かれた。

（訳者註）

「アメリカンバプテスト連盟」は北部連盟の名称。北部ではナザーンバプテストと

いわず、アメリカンバプテストとく大風呂敷的に自称した。

この委員会は主に、公共道徳に関するバプテストの信念を社会に広めるのに役立った。また教会と国家の分離原則を保護することにも貢献した。「北米バプテスト同盟」という全国組織もできた。これは立法権をもたない同盟だったが、全国の全てのバプテスト団体が連合して信仰表明する機会を造った。

南北戦争は、北軍本部と南軍本部が一般合意を交わして終結した。捕虜の交換条件は常時友好的だった。この友好関係は、南部のリー將軍が北部のグラント將軍に降伏し、両者が握手を交わして各々故郷に帰ると、すぐに始まった。

降伏調印はバージニア州のアポマトックスでなされた。それとほとんど同時に、バプテストたちは戦争の真の犠牲者の救済に向かった。黒人がそれである。

9 章 抜群の教育活動と社会改善活動

【黒人教育への貢献】

この時点での黒人は、他人に恩恵を施すような人間になるとは全く予想されてなかった。自由は与えられたが、それをどう使っていいかわからない状態に彼らはいた。いつてみれば、高価なベネチアングラスの花瓶をおもちゃとして与えられ、ただ途方に暮れて立ち尽くしている子供みたいなものだった。

バプテスト自由吟味者たちは、彼らを入念かつ慎重に導き育てた。それは国内宣教師がした仕事としては、教会史上最も素晴らしいものといっていだろう。バプテストたちは学校を建て、教会を建て、あらゆる種類の施設を建設した。自分たちの利害を度外視し、黒人だけのためにそれを行った。何時か誰かが、このバプテストたちの偉大な働きについて書くだろう。黒人教育物語のなかでも、バプテスト自由吟味者は偉大なヒーローとして描かれるだろう。

奴隸時代にも解放後の時代にも、自由吟味者は多くの黒人をイエス・キリストへの信仰に導いた。一九五四年時点で、黒人バプテスト教会の会員数は七〇〇万人余を数え、教会数は三万七千を超えている。

「宗教要素を含んだ教育こそが、自由を守る防壁装置になる」というのが、バプテストの確信だった。黒人たちの自由が危機に瀕する時には、その教育が彼らを救い出すことになる。彼らは信じていた。バプテスト自由吟味者が建てた黒人学校の数、他の教派のそれを圧倒している。

【群を抜く教育活動】

近代バプテストといえば、政教分離国家実現への輝かしき貢献が、まず思い浮かぶ。だがこれを賞賛するあまり、彼らが教育活動によって我々に与えたものを忘れてはならない。バプテストが行った宗教要素込みの教育貢献は全国に及んでいて、ただ南部空間だけに限られるものではない。時間的にも、奴隸解放時だけに限られてはいない。バプテストはいつでも何処でも教育者なのだ。

キリスト教界に日曜学校を創始したのもバプテストである。ロバート・ライクスがその創始者だ。その学校は教師を有給で雇い、日曜毎に、親の貧しい子供たちのために、門戸を開いた。そこでは宗教的な事柄だけでなく、この世を生きるのに必要な知識も教育した。

聖書に関する大衆向きの学校を史上初めて設立したのは、ウィリアム・フォックスだった。一七八三年のことだ。彼はバプテスト教会の裕福な執事だった。一八七五年までにすでに、フォックスとバプテストの支援者の教育活動は、広範囲に展開していた。彼らはその運動組織を「日曜学校支援と奨励のための協会」と称していた。

アメリカで最初に日曜学校が設立されたのは、一八一五年である。場所は第一フィラデルフィア・バプテスト教会内だった。最初の日曜学校新聞も、一人のバプテスト自由吟味者が発刊したものだ。『ヤング・リーパー（若き刈取り人）』というのがその紙名である。『国際正規日曜学校授業』というのもそうだ。シカゴのバプテスト信徒、B・F・ジェイコブズが創始者である。

【社会改善活動でも先端を切る】

バプテスト自由吟味者の活動は、さらに新しい方向に進展した。かの著名な欧州人ビッサー・フーフトはこういつている。「米国キリスト教の明白な特徴の一つは、教会の社会活動が盛んなことだ」〜と。けれども、この言葉には「とりわけ盛んなのは、バプテストによる活動だ」と付け加えるべきだろう。

この国のクリスチャン社会運動史には、旧約聖書に出てくる大予言者エレミヤのような人もいる。燃えるがごとき聖なる魂をもったバプテスト自由吟味者、ロチェスターのローシェンブッシュがその人だ。彼は人間に通じていて、それ故での人間愛に満ちていた。彼は年少者労働に関する本を夜通し読んで、朝になると自ら教える教室に入り、子供たちの悲惨な姿を学生に語った。幼少者の泣き声を、学生の心深くに、白熱した釘を打ち込むように、たたきこんだ。

ベダー博士がこれに続いた。彼は年少者労働の恐ろしさを、誰も反駁出来ない論法でもって語った。それを歴史家の姿勢で語った。また、創造神の御旨^{みむね}がこの地上の人

間の間でも成し遂げられるべきことを、明確に論証した。天の創造神王国で天使たちの間に成立していることが、地上でも成立しなければならない」というのだった。

ローシエンブッシュとベダーの掲げた旗の後を、何千というバプテスト自由吟味者が続いた。彼らは社会正義、経済正義のために戦い続けた。かくしてこの種の戦いは二〇世紀という世紀の特徴になった。一九一四年、二人はアメリカ醸造業協会の年報に、「醸造監督と醸造の敵」としてその名を記された。だが彼らはそれを名誉と受けとめた。

（訳者註）

この業界では年少労働者を多数使用していたのであろう。

一九二四年には、バプテスト教会の壁は、第一次世界大戦死者の名を記した記念銅板で一杯になった。この事態について彼らは次のごとき宣言をしている。「……教会は戦争を呪い、話を聞く人を当惑させているだけでは足りない。もっと実践的な役割をはたすべきだ。平和に役立つ事柄について議論し、それを促進しよう」と。自由

吟味者は、こうして戦争に対する姿勢を一八〇度方向転換した。これは古代ローマ神話の軍神マールスへの、公式のアップリカットだった。

（訳者註）

マールスは勇敢な戦士として慕われたローマ神話の神。青年の理想像とされた。

【品種改良された人間】

「バプテストたちはまだバプテスト特有の精神を認識していない」と評する人もいるかも知れない。だがそれは、早まった判断というものだ。バプテストたちは、自分たち固有の精神をよく識っているのだ。彼らは、語るべき時が来たときに、ものごとを明白・率直に語る。それが彼らの習性だ。それまでは、本音を語らない。聞く人が当惑しようと語らない。バプテスト自由吟味者は変化に富んだ人間なのだ。だが、個人の自由、思想の自由を説くために、他に方法があるだろうか？

彼らは品種改良された人間なのである。時として既成社会の法律を超えてしまう。

無鉄砲で、休む事なき型破り人間だ。社会に自ら溶け込んでいくようなことは、出来ない人間なのだ。

矛盾してる？ その通り、矛盾に満ちた人間だ。でも彼らは社会において、精神的骨組みを支える道徳的筋肉の役目を、担っているのだ。

また彼らは昔から一貫して愛国者だった。母国のため建設的に働き、自由が否定される時には常に、いのちを投げ出して戦った。旧約時代にフルがモーセの腕を支えたように、彼らはクロムウエルの腕を支え、ワシントンの腕を支えてきた。

(訳者註)

旧約聖書の『出エジプト記』一七章にモーセがイスラエル軍を率いてアマレク人の軍隊と戦った話がある。戦はモーセが手を挙げているとイスラエルが有利になり、手を降ろすとアマレクが有利になった。だがモーセの腕は疲れてくる。そこでフルがアロンと共に左右でモーセの手を支えて、勝利したと記されている。著者ミードはこの話を踏まえてフルを持ち出している。

バプテストは数多くの戦で戦闘部隊に参加してきた。彼らはまた、ラクノウを救済するためにヘンリー・ハブロック卿を送った。

(訳者註)

ラクノウは英国支配に反対するインド人の反乱の指導者。事件はセポイの反乱と呼ばれ、インド人初の独立戦争ともいわれる。バプテスト教会から、インド人救済のためにハブロック卿が派遣されたのだろう。著者ミードはバプテストが抑圧されている側を支援するのは当然としているので「インド人支援のため」と敢えて明記していないのであろう。

テキサスにはサムエル・ヒューストンを送った。

(訳者註)

ヒューストン (1793-1863) は米国の軍人、政治家。後にテキサス共和国大統領、

テキサス州知事になった。

けれども、もしもクロムウェル、ワシントン、ヘンリー卿、サムエル・ヒューストンらが、国家によかれと思つて創造神を否定するようなことをしたらどうか。バプテストはこの人たちを否定しただろう。『低級な愛国心』が一瞬でも目に留まったら、彼らは即座にその人物を否定するのだ。実際、彼らはそれまで幾度も幾度も国家を否定してきた。創造神の王国（天の王国、略して天国）への忠誠のために、国家を否定してきた。彼らにはそうする心が、『高級な愛国心』なのだ。その精神を持って彼らは実際に現実世界で、国家のために戦つてきた。

【良き矛盾を断行】

矛盾？ そう、これは矛盾だ。だが、そういう矛盾は必要なのだ！ たとえば、かなりの数のバプテスト教会に、宣教活動に反対する感情が強固にあつた。そうである一方で、自由吟味教会は世界にカレ、ジャドソン、ライスといった宣教者を送り出した。

またバプテスト自由吟味者は、幼児洗礼を否定してきた。ところがその一方で、我々

に子供の為の日曜学校を提供してくれた。

一般教会員には教育活動の効果を疑問視している人が沢山いた。そうである一方で、彼らは多数の学校を世に贈った。単科大学では、ベイツ、バックネル、コルビー、デニソン、フランクリン、バツサー、ウエイクフォレストなどがそれだ。総合大学には、バイラー、ブラウン、コルゲート、リッチモンドなどがある。その他、神学校を一八校設立したし、多数の中等学校をも造った。この時点でバプテスト派は、米国の他のどの教派よりも多くの資金を、教育に投下している。

自由吟味者はまた、簡素な礼拝を愛してきた。だが、その一方で彼らはイスラエルで、美声の歌手の集団を作った。その数は数えられていないのだが、数多く造った。またバプテストからは、多くのゴスペルソングが出ている。

(訳者註)

それらの多くは南部バプテスト地帯で造られたので、今日では「サザン・ゴスペル」

の名で呼ばれ、福音音楽の一ジャンルを形成している。これらはサザンバプテスト教会の礼拝でうたわれ、それを歌うプロのゴスペル歌手がたくさんいる。

その題名のいくつかをここに挙げておこう。

「我等が絆に祝福あれ」「朝の光」「アメリカ」「イエス王座に座したまえり」

「嵐のヨルダン川土手に我は立てり」「祝福の泉に來たれ」「比類なき価値」「目覚めよ」

「わが魂よ」「堅き土台」「我が希望は主にあり」「磐を固めよ」「イエスの名の力」

「救い主よ」「死にゆく愛に」「聖なる聖なる聖なるかな」「ヨルダン川に集おう」

「イエス我を導きたもう」「我常にイエスを求む」

これに匹敵する活動を産み出している教派は、他にあるだろうか？ 矛盾だって？ これを矛盾というならば、そういう矛盾は最大限に活用すればいいのだ。

（9章 抜群の教育活動と社会改善活動 完）

終章 流血の歴史土壌から咲き出た花

【とどまることなき信徒増大】

バプテスト自由吟味者は、数の力も持つようになってきている。その信徒数は、

一八〇〇年には十万人、

一八五〇年には八十一万五千人、

一九〇〇年には五〇〇万人余、

一九五四年には一千七百万人

へと増えてきている。

（訳者註）

AD二〇〇〇年時点では、サザンバプテスト連盟だけで、四千万人と推定されている。

数は力をあらわす。成長力と実践力を示す。だがその会員数増大は、歴史的偶然によるものではない。バプテスト自由吟味者たちが、世界で最も人間に好かれる思想をもってきたからなのだ。また、それを実現するに最も効率的な方法をとってきたからなのだ。

彼らは自由の大切さを主張し続けてきた。絶対的自由を叫び続けてきた。そしてそれを実現してきた。上流階級ではなく、大衆に訴えて実現してきた。大衆は自由を最も必要とする人であり、それを得るために最も激しく働く人々だ。

自由吟味者は、官職を望んだこともなかった。長細い小屋で育ち、小さな町の牢獄で日を過ごした。病人に奉仕し、身分の低い人々を支援してきた。バプテストたちはその記録を名誉あるものと思っている。

いま世界中の自由吟味者を合計すれば、2千万人にのぼる。そのことに、何の不思議もない。自由吟味教会に成長停止を命じるのは、太陽に移動停止を命じるようなものなのだ。

【天に属す人、世に属す人】

人の精神は、生まれながらの状態では「この世」に軸足を置いている。だが、自由吟味者は品種改良された人間だ。彼らの軸足は、「天国」（創造神が王として統治する天の王国）に置かれている。

（訳者註）

聖書では、創造神の王国である「天（天国）」と、この地上の「世」とを絶対的に対立するものとしている。天は創造神の統治が貫徹する空間であり、世は一時的にその支配権が悪魔に与えられている空間、とする。そして悪魔は全てにおいて創造神に対抗するものであるから、創造神と悪魔は絶対的な対立関係にあり、従って天の論理と世の論理とは絶対的に対立関係にあるとみるのである。

例えば天は「聖 holy、ないしは heavenly」であるのに対して世は「俗 (secular、ないしは worldly)」である。そいつの地上に生きる人間は基本的に俗なる「世」の論理で生きるという事実認識である。その中で天の論理をもつ聖書の言葉を心に

抱く人間だけは、例外的に聖なる「天」の論理で生きることになる。だから聖句自由吟味者は、「世」と対立する「天」の論理で生きる人ということになる。著者ミードは、ここでその視野をそのまま話に持ち込んで、自由吟味者と絶対的に対立関係にある人々を「世 (world)」と称しているのである。

「世」の側に属する人々は、自由吟味者の成長を止めるべく、ありとあらゆる手段を講じてきた。その結果、バプテスト自由吟味者の歴史は、殉教者が流してきた血の中に容易に見出せるようになってきている。自由吟味活動の歴史を記述する歴史家のインクの中にはない。殉教者が流した血の中に、見出せるのだ。

「世」に属する人々は、広場に造られたむち打ちコーナーで、バプテストたちをむち打ちたいた。そうやって衆目の面前で辱めを与えようとした。ところが結果はどうだ。むち打ち刑場が残ることによって、いま「世」の側の人々の方が恥ずかしい思いをしている。

「世」は自由吟味者に鎖を付けて投獄した。ところが、その鎖の反対の端は、「世」の側に属する人々自身の首に巻き付いていたのだ。

「世」の人々は、ボストンや南部諸州で、バプテスト自由吟味者たちの身体から、血を滴らせてきた。ところが、まさにその血の染み込んだ土壌から、米国で最も美しい花が咲き出たのだ。

「世」のなんと愚かなことか！

人々はバプテスト自由吟味者に、有害人間の烙印を押してきた。そうやって彼らを抹殺しようとした。ところが結果はどうか？ いまや「世」に属した人々の方が、自分らがなしたその行為の故に、有害人間だったという刻印を、押されることになっているのである！

（終章 流血の歴史土壌から咲き出た花 完）

訳者あとがき

本書は、Frank S. Mead (1954), "The Baptist", Broadman Press, Nashville, Tennessee の邦訳に訳者解説をつけたものです。

著者、フランク・S・ミード（一八九八～一九八二）は、アメリカに生まれたクリスチャン・ジャーナリストで、週刊新聞「クリスチャン・ヘラルド」の編集長を務めつつ、「クリスチャン・センチュリー」「クリスチャン・ヘラルド」「リーダーズ・ダイジェスト」等の各誌に、福音関係の論考を執筆する生涯を送っています。

一九五一年には、その豊富な情報知識を用いて『合衆国キリスト教派便覧』（第十版は Handbook of Denomination in the United States, Abington Press, Nashville）を出版しています。この本は米国に数多くあるキリスト教派を入念かつ客観的に説明した名著で、現在も十版以上の増刷を重ね、教派解説書の代表書籍となっています。

本訳書の原著書は、戦前の一九三四年に初版が上梓されています。小さな冊子本の故に目立ちませんが、これもまた近代英国を活性化し、かつアメリカ国家の基礎構造

を築いた、近代バプテストの活動史をコンパクトに描いた労作です。

だがこの原著書には、一般読者の理解を阻むものが多く含まれています。冒頭に述べたように、聖句自由吟味活動は、迫害され続けた運動でした。権力者は、活動者の群れを周期的に襲い、逮捕、処刑し、その文書を焼き捨てました。現在残っている歴史資料は、焚書される中でかろうじて残存した少量です。それを理解するのに必要な背景情報も、いまもほとんどあらかた覆い隠されてきています。だから本書のような書物は本場の米国においてすら、自由吟味者以外の人々には理解が困難。今もそうです。

ミードはそういう状況の中で本書を書いています。本を著作する人間は、一般読者にもわかって欲しいという望みを捨てきれないものです。彼も多くの場面を「ここはどう理解させようか……」と身もだえながら書いたのではないのでしょうか。その状態で、冷静で客観的な叙述に努めている姿が浮かびます。

しかしとうとうもどかしさに耐えきれなくなったのか、最終章で、抑制し続けてきたミードの心情が爆発している！これで彼自身がくしくす精神的にはくバプテスト自由吟味主義者であることが露呈してしまいました。鹿嶋はそれを微笑ましくな

がめながら訳出作業を進めました。

……

原著書はそういう本ですから、日本の読者にも慣れない用語が多く、最初の一読は退屈なものになるかも知れません。その場合には、是非もう一度読み返していただけたらと思います。さすれば多方面に貴重な益をもたらすでしょう。

たとえば牧師さんら聖職者の目を開き、教会を伸びやかにするでしょう。日本にはヘボン式ローマ字のヘボン先生の努力で邦訳聖書ができ、とにかく聖書という書物は入りました。だがそれを自由に吟味する活動方式はまだ入っていない。日本人はまだ自由吟味活動の流れを知らないのです。その結果、キリスト教活動とはみな教団が正統とする教理を持つてするものだ、という通念が暗黙のうちに出来上がってしまった。それ故、日本の聖職者や信徒は、自分の聖書解釈が「異端！」と責められるのは……と恐れながら教会生活をするようになっていきます。

異端とは正統教理に沿わない解釈を意味します。ところがどの教会も自己の教団の正統教理をハッキリ認識していないのです。そうした漠然としたなかで、日本の聖職者や信徒は、自分がいつ「異端！」と（同業者から）烙印を押されるかという恐れでビクビクしながら教会生活をしている。外から見ると滑稽な姿ですが、一概に笑ってばかりいられない「笑えない悲劇」です。本書は日本の教会をそこから劇的に解放するでしょう。

経営者や政治家の目もこの本は開く力を持っています。太平洋側の日本近海を流れる二大潮流に黒潮（北上する）と親潮（南下する）があります。二つの潮流は宮城県近辺の沖でぶつかり、共に東方の太平洋方面に向かいます。これら潮流の知識に空白部分があっても、船舶の操作者は現場の知恵と勘である程度の運行は出来る。だが、現場の流れや波が何故起きるかや、その大局的・長期的な見通しの認識は間違っていく。気がついたら太平洋に流し出されていたということも起きえます。

西欧史における自由吟味活動の知識の陥没は、これに似た状況を形成します。経営者は国際社会の動きの正しい理解が出来ないでも、その時その時の対処はある程度はできる。だが知識陥没は、事件の意味理解や、次の長期的な見通しに誤りを混在させ

ていきます。昨今の東芝の悲劇も、これに起因するところが大きい。本書はそれを回避する力を読む者に与えます。

政治家には正しい世界史知識がさらに一層必要です。特に現代世界を主導している米国の力を正しく知るのは重要で、それにはキリスト教活動の正しい全体像イメージが必須です。今の米国の力は、アメリカ人一般ではなく、バプテストとかメノナイトとか呼ばれる自由吟味者が造成したものであると知ると、いかに多方面に目が開けることか。

また、ゆがみのない世界史知識は日本だけでなく世界各国の為政者にも必要です。世界のあちこちで起きる事件はそこではじめて正しく意味理解されるのです。人類が二手に分かれて殺し合った二度の世界大戦の遠因も陥没した歴史知識にある。そうした「この世の地獄」を回避する力も、この本は与えてくれます。

本書が提供する自由吟味方式の知識は教育関係者にも宝になるでしょう。聖句を自由に深く吟味していくと人間改造がなされていきます。吟味活動が、広く人間の知的・精神的原動力を産むのです。これはもう、一つのプリンスプルといってよく、この原

理は肌の色に関わらず働きます。そしてこの方式は教室にも援用できる。北欧諸国は濃厚な自由吟味文化圏です。これらの国での学童、生徒ひいては人民の高い知力は、スモールグループ方式を初めとする自由吟味方式の教育部門への援用によるのです。

以上すべての認識に至る門に本書がなる予感がします。ジョイフルな心地が訳者の心底から湧き上がってきています。

(完)

訳者略歴／鹿嶋春平太

宗教社会学者。

著書は『聖書の論理が世界を動かす』『誰もが聖書を読むために』『神とゴッドはどう違うか』（以上、新潮社）

『聖書が面白いほどわかる本』『キリスト教のことが面白いほどわかる本』（以上、中経出版）など。

電子書籍には『自己神欲が諸悪を産む』『私のヨハネ伝解説』（1～5）（以上、Amazon Kindle）などがある。

本名：肥田日出生は経済学者。

明治学院大学名誉教授。

著書に『経済学とマーケティング学の対話』『凹型小売革命』（以上、ダイヤモンド社）、

『高品質の時代』（日本経済新聞社）、『小売原論』（TBSブリタニカ）、

『現代マーケティング論考』『マーケティングミックスの論理』（以上、中央経済社）など。

【ブログ】

鹿嶋春平太チャーチ

<http://blog.goo.ne.jp/shunpeita1>

【E-Mail】

shunpeita1@yahoo.co.jp

【YouTube】

連載動画「ヨハネ伝解説」

<https://www.youtube.com/watch?v=8iz7FmUYtYw>

バプテスト自由吟味者

初版発行 2017 年 9 月 30 日

著 者 鹿嶋春平太

表 紙 絵 大槻ゆり

装丁組版 編集工房 DEP

発 行 編集工房 DEP

発 売 元 株式会社かんぼう

印刷・製本 モリモト印刷株式会社